

## 江之浦測候所を中核とした文化観光推進拠点計画

## 目次

1. 実施体制	3
2. 事務の実施体制	5
3. 基本的な方針	6
3-1. 現状分析	
3-1-1. 主要な文化資源	
3-1-2. 来訪者の動向	9
3-1-3. 他の文化資源保存活用施設との比較	11
3-2. 課題	12
3-3. 文化観光拠点としての機能強化に向けて取組を強化すべき事項及び基本的な方向性	14
3-4. 地域における文化観光の推進への貢献	18
3-5. 文化の振興を起点とした、観光の振興、地域の活性化の好循環の創出	19
4. 目標	20
5. 目標の達成状況の評価	25
6. 文化資源保存活用施設	26
6-1. 主要な文化資源についての解説・紹介の状況	
6-1-1. 現状の取組み	
6-1-2. 本計画における取組	
6-2. 施行規則第1条第2項第1号の文化観光推進事業者との連携	27
6-2-1. 現状の取組み	
6-2-2. 本計画における取組	28
6-3. 施行規則第1条第2項第2号の文化観光推進事業者との連携	
6-3-1. 現状の取組み	
6-3-2. 本計画における取組	29
7. 文化観光拠点施設機能強化事業	30
7-1. 事業の内容	
7-1-1. 文化資源の魅力の増進に関する事業	
7-1-2. 情報通信技術を活用した展示、外国語による情報の提供その他の国内外からの観光客が文化についての理解を深めることに資する措置に関する事業	32
7-1-3. 国内外からの観光旅客の移動の利便の増進その他の文化資源保存活用施設の利用に係る文化観光に関する利便の増進に関する事業	33
7-1-4. 文化資源に関する工芸品、食品その他の物品の販売又は提供に関する事業	34
7-1-5. 国内外における文化資源保存活用施設の宣伝に関する事業	35
7-1-6. 7-1-1～7-1-5の事業に必要な施設又は設備の整備に関する事業	37
7-2. 特別の措置に関する事項	39
7-2-1. 必要とする特例措置の内容	
7-3. 必要な資金の額及び調達方法	40
8. 計画期間	42

## 江之浦測候所を中核とした文化観光推進拠点計画

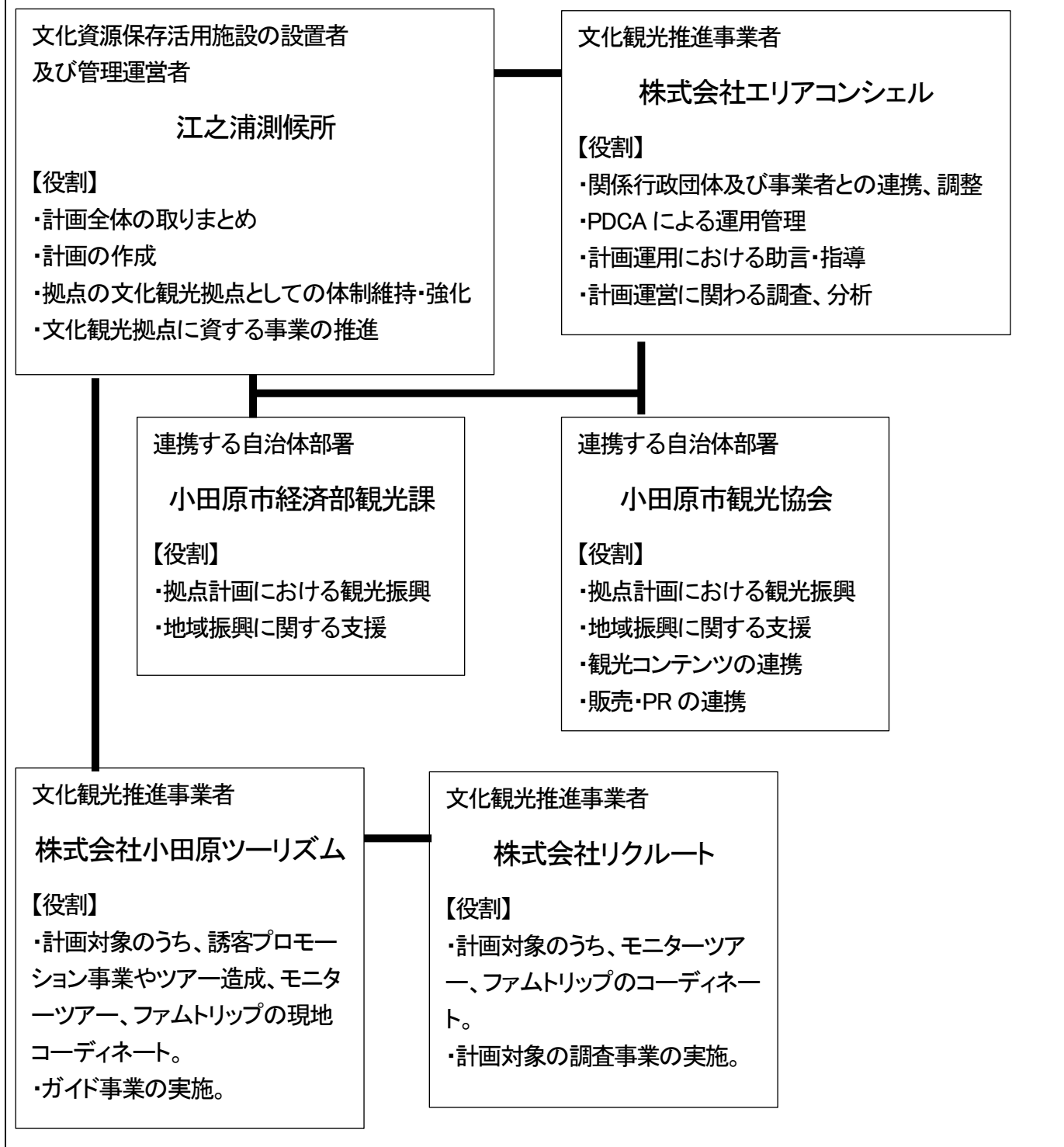
### 1. 実施体制

文化資源保 存活用施設	名称	江之浦測候所	所在地	神奈川県小田原市江之浦 362 番地 1
申請者 文化資源保存活 用施設の設置者	名称	公益財団法人小田原文 化財団	所在地	(同上)
	代表者	代表理事 小柳敦子		
	地方公 共団体 内部の 役割	該当しない		
共同申請者 ① 文化観光推進 事業者	名称	小田原市	所在地	神奈川県小田原市荻窪 300 番地
	代表者	市長 守屋輝彦		
	役割	施行規則第 1 条第 2 項第 1 号の文化観光推進事業者		
共同申請者 ② 文化観光推進 事業者	名称	一般社団法人小田原市 観光協会 (DMO)	所在地	神奈川県小田原市荻窪 350 番地の 1
	代表者	会長 外郎藤右衛門		
	役割	施行規則第 1 条第 2 項第 1 号の文化観光推進事業者		
共同申請者 ③ 文化観光推進 事業者	名称	株式会社小田原 ツーリズム (DMC)	所在地	神奈川県小田原市本町 1-6-13
	代表者	代表取締役社長 夏苺健二		
	役割	施行規則第 1 条第 2 項第 2 号の文化観光推進事業者		
共同申請者 ④	名称	株式会社リクルート	所在地	東京都千代田区丸の内 1-9-2

文化観光推進 事業者	代表者	代表取締役社長 牛田圭一		
	役割	施行規則第1条第2項第2号の文化観光推進事業者		
共同申請者 ⑤ 文化観光推進 事業者	名称	株式会社エリアコン シェル	所在地	神奈川県小田原市栄町3-12-8
	代表者	代表取締役 飯山淳二		
	役割	施行規則第1条第2項第2号の文化観光推進事業者		

## 2. 事務の実施体制

小田原市の文化観光を推進する文化観光拠点施設を江之浦測候所(公益財団法人小田原文化財団)とし、小田原市関係各課と連携し、小田原市の観光客の動向を踏まえた小田原市観光戦略ビジョンに沿って本拠点計画を立案し、その各事業について、小田原ツーリズム(DMC)等の文化観光推進事業者と協働し、また周辺文化施設・宿泊施設と連携して事業実施に深く関わることで、事業実施効果を最大限引き出すよう取り組む。



### 3. 基本的な方針

#### 3-1. 現状分析

##### 3-1-1. 主要な文化資源

###### 1. 小田原市の文化的資源の概要

- ・ 江之浦測候所が位置する小田原市には 15 世紀の戦国大名北条氏の城として特に認知度の高い小田原城や、豊臣秀吉が小田原攻めのために築いたといわれている石垣山一夜城といった城下施設、江戸時代に農村改革を指導したことで名を馳せた二宮尊徳（金次郎）の生誕地として金次郎を讃える報徳二宮神社や尊徳記念館、小田原城下独自の祭として発展してきた「北條五代祭り」、「小田原ちょうちんまつり」、「一夜城まつり」、「おでんまつり」、「梅まつり」など四季を通じたお祭など、歴史や文化に根付いた多くの観光資源を保有する。
- ・ 小田原の観光資源には「海・里・山」を起点としたものがあり、「海」に関しては 250 年前、沿岸漁業が大変盛んで豊かな漁場として知られた当地において、魚肉の保存利用として「小田原かまぼこ」が誕生。以後、今日にいたるまでかまぼこ生産が盛んである。現在も港から直行で卸される新鮮な海鮮類が提供されることに加えて、遊び・観光面においても季節ごとに異なる「旬」を堪能することが可能な場所である。「里」として、温暖で穏やかな気候と豊富な水に恵まれている小田原市では水田地帯の稲作と樹園地のミカンを主体とした農業が行われており、併せて地域農産物の高付加価値化と遊休農地の解消を目指した農業が進められ、特産品開発による農産物の PR、ブランド向上に向けた取組など、小田原市ならではの農業が展開されている。「山」においては、林業が盛んであり、木材の流通・加工までを一つのまちで行うことができる点が、大きな特徴となっている。小田原に継承される木の文化としては、寄木細工や小田原漆器があり、土産物としても人気を博している。一方で、昨今ではトレイルやマウンテンバイク、バーベキューといった山を活用したアクティビティの人气が高まってきており、コロナ禍、またコロナ以降においても利用者が増え続けている貴重な観光資源である。
- ・ 広域では伊豆箱根地域の玄関口となっており、伊豆方面には真鶴・湯河原・熱海といった温泉地を擁している。箱根は、関東一の温泉保養地として知名度が高いが、同地には 20 以上もの美術館が点在している。1969 年に開館した屋外型美術館の先駆けである「箱根彫刻の森美術館」、実業家・岡田和生氏が収集した東洋・日本美術品などを展示する箱根最大級の美術館「岡田美術館」、モネやルノワールなどの印象派の作品を中心に国内外の多彩な作品を展示する「ポーラ美術館」など、多くの来館者を受け入れている。「ポーラ美術館」は近年、現代美術の収集にも力を入れており、江之浦測候所の設立者である杉本博司の写真作品を複数所蔵している。箱根は、国立公園である富士箱根伊豆の雄大な風景や温泉と文化を同時に求める観光客を獲得できる地域であるが、小田原市内の観光と、箱根方面への観光は切り離されているのが現状である。
- ・ 伊豆方面も箱根同様に温泉保養地として知られている他、圧倒的な收藏品と展示スペースを保有し、初島や伊豆大島が一望できる庭園を擁する「MOA 美術館」、「中川一政美術館」、「池田満寿夫美術館」など文化面でも充実している。MOA 美術館は、2017 年に展示空間のリニューアルを杉本博司が手がけたことでも知られ、江之浦測候所とあわせて見学をする美術ファンが多くいる。
- ・ 江戸時代には東海道の宿場町として栄えた小田原市は、立地的に市の南西部に箱根連山につながる山地、東部は曾我丘陵と呼ばれる丘陵地帯。市の中央には酒匂川が北から南に流れてそのまま相模湾に通じており、海、山、川がそろった風光明媚な場所として知られている。夏は涼しく冬は暖かい恵まれた気候であることから明治から昭和初期にかけて北原白秋や谷崎潤一郎、尾崎一雄といった文化人や伊藤博文や大隈重信など政財界人の保養地として尊ばれ、別荘や別宅が建てられた。中でも「最後の数寄茶人」と評される松永安左エ門が設立した「松永記念館」では、松永安左エ門が収集した多様なコレクションを公開しており、庭園では国登録有形文化財である別荘「老樗荘」と、同じく国登録

有形文化財の茶室「葉雨庵」を見ることができる。

- ・ 2021年9月には「小田原三の丸ホール」が小田原城の向かいに開館し、クラシックコンサートから歌舞伎、落語、レクチャーなど、幅広い公演プログラムを提供している。

## 2. 江之浦測候所の文化資源の概要

- ・ 2017年10月に公益財団法人小田原文化財団が開館した江之浦測候所は、国内外に高い評価を得る現代美術作家・杉本博司によって設立された。杉本の写真作品や彫刻作品、収集した古美術品を自ら設計した建築空間の中に組み込む展示は、ここでしか体験することのできない唯一無二の美術施設として、国内のみならず海外の美術愛好家にも評価が高い。
- ・ また、国内外で評価の高いアーティストを招聘しパフォーマンスを開催するなど、現代美術やパフォーマンスアートをはじめ、日本の伝統芸能の発信にも力を入れている。

### 1.) 美術作品

- ・ 代表作『海景』を含む写真作品18点を始め、立体作品など杉本博司作品115点。  
特に『海景』はメトロポリタン美術館にも所蔵されている杉本の代表的なシリーズである。杉本は作品の制作のきっかけが小田原の海であったことを多くの自著で語っているが、江之浦測候所では、その「海景」シリーズの作品と、実際の小田原の海とを一度に見ることができる唯一無二の場所となっている。



杉本博司《Caribbean Sea, Jamaica》1980



杉本博司  
《数理模型 0010》2004

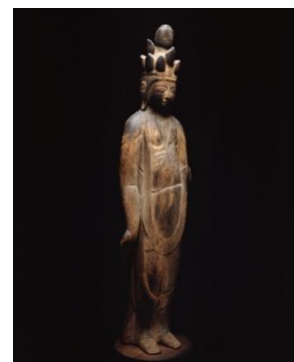
- ・ 杉本博司が収集した古美術品、化石、隕石などの幅広いコレクション作品900点。  
特に春日信仰美術に関する作品については点数、質ともに充実したコレクションがあり、重要な作品も多く所蔵している。『春日若宮曼荼羅』（鎌倉時代）は春日宮曼荼羅の主題を扱う作品の中でも、春日若宮社のみを描くという点で異例であり、重要な作例である。



《春日若宮曼荼羅》  
鎌倉時代



《春日若宮神鹿像》  
鎌倉時代



《十一面観音立像》  
平安時代

## 2) 建築群・ランドスケープ

- 敷地内の建築物や構築物である「夏至光遥拝<sup>こうようはい</sup>100メートルギャラリー」、「冬至光遥拝<sup>こうようはいずいどう</sup>隧道」、「光学硝子舞台」などは杉本博司設計・監修の元に建設されている。
- 千利休の茶室「待庵」を本歌として作られた茶室「雨聴天<sup>うちょうてん</sup>」では、月替わりの杉本博司自筆の掛け軸と共に季節の花を床に設え、展示している。
- 鎌倉明月院の正門として建てられ、後に根津美術館の正門となった「明月門」（室町時代）など、歴史的価値の高い建造物が多数移築されている。
- 敷地内には「法隆寺若草伽藍礎石」や「日吉神社礎石」など由緒ある礎石、巨石が点在している。
- 2022年には「甘橘山 春日社」を創建し、奈良 春日大社より御祭神を勧請した。



《光学硝子舞台》



茶室《雨聴天》



《明月門》室町時代

### 【敷地内恒久展示建築・彫刻】

・敷石と巨石	・三角塚
・夏至光遥拝 100メートルギャラリー	・日吉神社礎石
・冬至光遥拝隧道	・法隆寺 若草伽藍礎石
・光学硝子舞台	・光井戸
・明月門	・甘橘山 春日社
・伽藍道	・春日提灯
・雨聴天(茶室)	・化石窟(化石 18点を収蔵)
・鉄灯籠	・数理模型 0010
・明日香石水鉢	・数理模型 0004
・木賊張り	・被爆宝塔塔身 (南北朝 - 室町時代)
・旧奈良屋門	・片浦稻荷大明神 社殿
・鉄宝塔(鎌倉時代)	・出湯仏 三体
・小松石 石組	・石造五重塔
・内山永久寺十三重塔	・東大寺七重塔礎石
・古信楽井戸枠(室町時代)	・道標 二丁信貴山
・石舞台	・五輪塔
・野点席	・木化石
・京都五条大橋礎石	など

## 3) 自然景観と農業事業

- 江之浦測候所に隣接する土地の多くは柑橘畑である。小田原市での柑橘栽培の歴史は江戸時代まで遡り、特に江之浦測候所が立地する片浦地区は現在でも神奈川有数の柑橘類の産地である。江之浦測候所では片浦地区の美しい景観を守りながら、美術作品と自然環境が相互に響き合う展示環境を作り上げている。

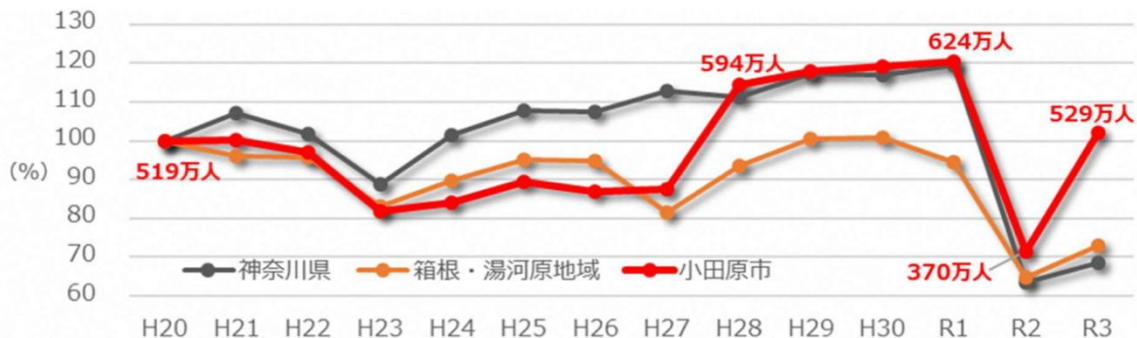
- 施設入口エリアで週末に営業している屋外カフェ「ストーン・エイジ・カフェ」では、相模湾を見渡せるロケーションを生かして、見学客が海を眺めながらゆったりと過ごせるようなしつらえになっている。地産地消やフードロスの解消などサステナビリティに配慮しつつ、周囲の柑橘畑で収穫されたみかんで作ったフレッシュジュースや小田原市内の老舗コーヒー豆卸「スズアコーヒー」のコーヒーなどを提供している。

#### 4) 国内外のアーティスト、文化人を招いた公演、イベント活動の実績

- 前衛音楽からビジュアル・アートの領域まで幅広く活動するクリスチャン・マークレーや、大友良英、国際的に活躍する現代美術作家ティノ・セーガル等による、広大な敷地を利用したパフォーマンスをはじめ、石舞台での新作能「利休—江之浦」や「石橋 於 石橋」など伝統芸能の上演など、国内外のアーティストや演者を招聘し、江之浦測候所の特性を生かしたユニークな公演を開催している。
- また、茶室「雨聴天」を活用し、武者小路千家 15 代後嗣千宗屋氏を招いて茶会を開催するなど、観覧・観劇だけでなく、来館者がより主体的に体験できる参加・体験型の文化コンテンツの発信にも努めている。

### 3-1-2. 来訪客の動向

小田原市観光客数の推移(2008年/平成20年比)



(単位：上段=千人、下段=%)

	H20	H21	H22	H23	H24	H25	H26	H27	H28	H29	H30	R1	R2	R3
神奈川県	171,186	183,566	174,186	151,967	173,484	184,594	184,105	192,973	190,271	200,694	200,264	204,668	108,486	117,251
	100	107.2	101.8	88.8	101.3	107.8	107.5	112.7	111.1	117.2	117.0	119.6	63.4	68.5
箱根・湯河原地域	33,296	31,962	31,918	27,685	29,895	31,687	31,520	27,189	31,183	33,433	33,529	31,414	21,531	24,338
	100	96.0	95.9	83.1	89.8	95.2	94.7	81.7	93.7	100.4	100.7	94.3	64.7	73.1
小田原市	5,190	5,205	5,040	4,246	4,370	4,650	4,514	4,538	5,943	6,115	6,182	6,248	3,705	5,291
	100	100.3	97.1	81.8	84.2	89.6	87.0	87.4	114.5	117.8	119.1	120.4	71.4	101.9

出所：神奈川県入込観光客調査（各年）

※%は平成20年比

※箱根・湯河原地域：小田原市、南足柄市、開成町、箱根町、真鶴町、湯河原町

#### 江之浦測候所総入館者数及び小田原市観光客数 ※小田原市観光客数については、暦年集計

年度	江之浦測候所	小田原市
2017年度(平成29年度)	10,494人(※10月開館)	6,114,772人
2018年度(平成30年度)	22,719人	6,182,240人
2019年度(令和元年度)	28,913人	6,248,464人
2020年度(令和2年度)	19,615人	3,705,248人
2021年度(令和3年度)	23,188人	5,290,670人
2022年度(令和4年度)	34,009人	7,265,000人

※小田原文化財団資料、2021年版小田原市統計要覧より

## 1. 海外インバウンド需要

杉本博司は長らくニューヨークを拠点に活動してきた作家であり、ヨーロッパ地域での人気も高い作家である。そのため、江之浦測候所の来館者には海外の個人コレクターが多くみられる。加えて、海外の美術館（ハーシュホーン博物館やニューヨーク近代美術館（アメリカ）、ポンピドゥ・センター・メス（フランス）、コートールド美術研究所（イギリス）など）のパトロンや理事・評議員が江之浦測候所への訪日ツアーを組んだり、世界最大級の現代アートフェアであるアートバーゼル（スイス）も訪日ツアーの一環で江之浦測候所を訪れている。

また開館以来、中国・韓国・台湾からは団体・個人客がいずれも安定して来館している。これら東アジアでもアーティスト杉本博司の知名度が高いため、来日中の予定に測候所の訪問を組み込むべく事前に計画して来館している人も多い。コロナ禍前には来館客のうち約10%が外国人観光客であった。

一方で、小田原市にはインバウンド客へ強く訴求できる施設が小田原城のみという現状がある中、インバウンド誘客への取り組みが重要であることが「小田原市観光戦略ビジョン」の中で謳われている。

小田原市は新幹線が停車することを始め、5つの路線が乗り入れているなど交通アクセスの良さから観光客にとって立ち寄りやすい場所であるにも関わらず、箱根町と比べると観光客数に3倍近い乖離がある（2019年度数値：箱根町1,896万人、小田原市624万人）。箱根町に訪れるインバウンドを含めた多くの観光客をいかにして小田原へも立ち寄らせるかという視点は小田原市の観光施策としても重要な点である。

昨今は、小田原城址公園を含めた駅周辺施設の整備及び、小田原市内へのホテルやゲストハウスといった宿泊施設の増加によって、「箱根にはない歴史文化資産やナイトタイムを楽しみたい」という、インバウンド客への訴求力も高まってきている状況にある。そうした中で、江之浦測候所のインバウンド客が小田原市内へ、あるいは小田原市内のインバウンド客が江之浦測候所へと来館したくなる回遊的なコンテンツづくりや、スムーズに来館できる動線の確保、情報発信を強化していく必要がある。

## 2. リピーター客

江之浦測候所はその3割以上が来館経験のあるリピーター客という、リピーター率が高い施設であることが特徴である。

江之浦測候所の文化資源としての魅力として、相模湾の崖上のダイナミックな立地という景観や方位、季節性に富んだ建築が挙げられる。特に冬至の日の出軸線に沿うように設計された「冬至光遥拝隧道」や夏至の日の出の軸線に沿う「夏至光遥拝100メートルギャラリー」など、春分秋分、夏至冬至という節目に季節の光景を取り込むことで完成される景観を実際に体感してもらうため、「冬至光遥拝隧道」から冬至の日の出を眺めることができる「冬至光遥拝の会」（夏至、春分秋分も同様に実施）や、満月を鑑賞する「満月の会」などのイベントを実施していることも、来館客の再訪を強く促すことにつながっている。

## 3. 口コミ、紹介

来館客の口コミ及び紹介による来館率の高さも江之浦測候所の特徴のひとつである。趣向あふれる施設内部は、写真撮影が可能であり、InstagramやTwitterなどでは、来館者による江之浦測候所の風景、建物、木々や石のたたずまいをモチーフにした写真投稿が多く見られる。このようなSNSでの情報の発信、共有が、アートや文化に関心のある人々の訪問の大きな要因になっている。現在では観光客の旅前における情報収集の主流はSNSにシフトしており、江之浦測候所の持ついわゆる写真映えするコンテンツを行政等も活用していくことで、誘客効果は大きくなると考えられる。

#### 4. コロナ禍の影響

前述した表のように、江之浦測候所の来館人数は開館以降 2019 年まで増加傾向で推移していたが、コロナ禍の影響により、2020 年度には約 1 万人の年間入場者数の減少がみられた。これは団体客数の減少と共に、インバウンド観光客の著しい減少が大きな要因となったといえる。

小田原市の観光客数は、長く 400 万人前後で推移していたところ、2016 年度に天守閣の大改修を実施したこともあり、その後観光客は順調に増え続け、コロナ禍前の 2019 年は 624 万人となっていた。コロナ禍になり観光客数が激減しているのは他の自治体と同様であるが、近年新たな大型商業施設のオープンなどもあり、コロナ収束に向かいつつある現在では、天守閣の入館者も復調傾向にある。今後のウィズ・アフターコロナを踏まえた観光施策は、新たな観光戦略ビジョンが策定されたこともあり、より具体的にになっていくものと想定している。

#### 3-1-3. 他の文化資源保存活用施設との比較

##### 【草間彌生美術館】

日本を代表する現存作家の個人美術館に、前衛芸術家・草間彌生が設立・運営する「草間彌生美術館」がある。江之浦測候所と同じく 2017 年 10 月に開館した同美術館は、立地、敷地面積等に大きな差異があるものの、一人の作家をテーマとする美術館である点や、コロナ禍以前、海外旅行者からのインバウンド需要の高い施設であった点(コロナ禍以前、草間彌生美術館の入館者数の 5 割を海外からの来館者が占めていた)、また現代美術の愛好者や SNS 利用率の高い世代への訴求力の強い施設として、親和性があると考えられる。

・草間彌生美術館の入館者数は、2018 年度 51,938 名(開館日数 170 日間)、2019 年度 61,884 名(開館日数 161 日間)、2020 年度 32,357 名(開館日数 175 日間)、2021 年度 28,079 名(開館日数 142 日間)であった。

##### ・コレクション内容の比較

草間彌生美術館コレクションは「草間彌生の作品、関連資料」を主に展示している。世界的にも知名度の高いアーティスト草間彌生のこれまでの制作の歴史を深く知ることができる展示施設である。

対して、江之浦測候所は杉本博司自身の作品だけではなく、杉本がこれまでに収集した化石や礎石、古美術のコレクションも多く公開している。自然・宗教・歴史といった多岐にわたる作品ジャンルは、杉本博司の制作をより多面的に捉える一助となり、多くの来館者を引き付けている。1つのジャンルに収まらない江之浦測候所の切り口は、「杉本作品ファン」にとどまらず、より裾野が広い一般層の関心に応えることができる可能性を秘めている。

##### ・作品展示方法の比較

草間彌生美術館では年に 2 本の展覧会を開催し、展示替えを行いながら異なる作品を公開している。

江之浦測候所では、自然の景観の中で作品を体験してもらいたいという思いのもと、恒久展示されている作品が大半であり、作品の入れ替えは現在行っていない。また、現時点では古美術作品を展示できる施設が存在せず、杉本博司の作品創作の礎となってきた所蔵コレクションの大半が鑑賞してもらえない状態にない点が大きな課題であると言える。

##### ・立地、アクセスの比較

草間彌生美術館は東京都新宿区に位置し、東京メトロ東西線「早稲田駅」から徒歩 7 分という都心に存在している。アクセスも良く「東京観光」に訪れた観光客が無理なく日帰りで日程を組める立地にある。

対して江之浦測候所は神奈川県西部、小田原市に位置し、交通の便が良いとは言えない。最寄り JR 東海道線「根府川駅」であり、在来線利用で東京から 1 時間半、新幹線を利用した場合は小田原駅まで 30 分で到着するものの、在来線に乗り換える必要がある。更に根府川駅から江之浦測候所までは徒歩 40 分の距離があり、江之浦測候所が独自で運行している「無料送迎バス」を利用しての来館となり、かなり計画的に移動プランを立てる必要がある。また、自家用車での来館も可能だが、駐車場スペースが十分ではないという問題もある。

#### ・鑑賞体験の比較

都内一等地に位置し、展示面積が狭い草間彌生美術館での滞在時間は長くても 1~1 時間半であり、短時間で作品鑑賞を楽しむことができる。

10,000 平方メートルの広大な敷地に見どころが点在する江之浦測候所では、2~3 時間かけて見学する来館者が多い。また前述の通り、目的地の江之浦測候所まで移動にも時間がかかるため、1 日かけての「観光」、ショート・トリップになる傾向がある。今後は、従来の鑑賞スタイルである日帰りで美術館に行く行動から進化した、宿泊を伴う「観光」の側面をサポートし、長時間にわたるアート体験を提案していくことができるように、近隣の文化観光施設、宿泊施設等との連携を強化していくことで、作品鑑賞だけでは終わらない、「旅」の魅力を発信することが可能である。

#### ・作品解説等作品理解に関する取り組みの比較

草間彌生美術館では教育普及プログラムに力を入れており、特に子供に向けたワークショップが充実している。未就学児を連れて鑑賞できる「おやこで美術館」や、こども向けの鑑賞ツールである「美術館たんけんワークシート」の配布など、現代美術の魅力をわかりやすく伝えるプログラムを多数実施している。

江之浦測候所では団体に対するギャラリーツアーをはじめ、美術の分野に限らず、天文学やエジプト学、或いは料理など、幅広い知識人を招いたレクチャープログラムなどを行なっている。しかしながら、それらの多くは大人と対象としたプログラムとなっている。また、安全上の理由で通常は中学生未満の入館を制限していることから、今後、安全に配慮しつつ、子供に向けたプログラムを行なっていくことが重要課題である。

### 3-2. 課題

江之浦測候所を文化観光拠点として位置付け、小田原の文化観光の中心的施設とするためには、以下の 7 つの課題がある

#### 課題1 作品の所蔵数は多いが、その展示機会が少ない

小田原文化財団は杉本博司の作品、及び杉本博司が直接収集した古美術作品を 1,000 点ほど所蔵しており、今後も作品受け入れを予定している。杉本がコレクションした古美術作品は、杉本の作品制作に大きな影響を与え、杉本の作品理解の上でも重要な作品でもあるが、現在その展示機会が少ないという問題がある。また 2017 年の開館以来、江之浦測候所は恒久展示をメインとしており、リピーター来館者にとって新たな展示品を鑑賞できる機会を提供できていない。加えて江之浦測候所には、現在古美術作品など慎重な扱いを要する作品を展示できるスペースが存在しないことから、多くの古美術作品に関しては他館への貸出がメインになってしまっている。

## 課題2 作品理解が困難

江之浦測候所には屋外で展示される作品も多く、そのどれもが景観に溶け込むよう設置されている。そのためほとんどに作品解説の表示がなく、入館時に無料配布するパンフレットやハンドアウトに解説を記載している。杉本博司を見続けてきた長年のファン層は、深い知識を持ち合わせているため、これらパンフレットの情報でも十分であるが、反面、初めて杉本博司の作品に触れる人にとっては不親切との意見も寄せられている。作品の多くがアーティストの深い思想・思考に基いており、読み解く楽しさがあるが、初見の来館者にとってはハードルの高い作業ともいえる。また、ショップも併設した「待合棟」内では、江之浦測候所測に関する杉本博司のインタビュー映像のリンクをQRコードに記載し明示しているが、敷地内にはwi-fi設備もなく、また、山の中に位置しているため、キャリアによってはインターネットアクセスが難しい。

## 課題3 多言語対応が不十分

近年、英語圏外、特に中国、台湾、韓国などアジアからの来館者が増加しているが、ホームページや館内表示は日英の2言語しか対応できていない。開館当時から東アジア圏の中国・台湾・韓国からは多数の来場がみられたが、これらの国の特に団体客は滞在時間が短い傾向があることから、アジア3言語の対応も必要である。また、現在、江之浦測候所を訪れる海外旅行客の多くはアートコレクターや美術関係者など、美術に関心のある客層が大半であるが、今後「小田原市周辺の観光スポットの一つ」として江之浦測候所を訪れるインバウンド客の増加を視野に入れると、より多くの人々に適切に情報を提供し、更なる作品理解を促進する多言語の情報発信ツール、館内での言語サービスの充実も課題となる。

作品展示に関しては、江之浦測候所が所有する文化的資源のカテゴリーが多岐に渡ること、更に杉本博司による文章は洒落や言葉遊びも多用され、時として難解であることから、引き続き質の高い多言語化が必要である。

## 課題4 イベントが単発的であり、非持続的

一度来訪した来館者のリピート率を今後も持続的にあげるためには、これまで限定された人たちを対象として開催してきた、体験型コンテンツ(茶室「雨聴天」や野点席での茶会、舞台を活用しての演能、早朝や夜の見学会、季節に合わせた特別鑑賞会など)をより拡充し、単発的で限定されたイベントだけではなく、より広い範囲を対象にした、継続的なイベント開催の仕組みづくりを行う必要がある。合わせて、これらを実施するための環境整備と人員確保、アクセスの確保も課題である。

また、主要なターゲットとすべき富裕層に対しても単発的なイベントでは実績を残しているが、富裕層への訴求力を上げる継続的な取り組みの実施も課題である。

## 課題5 アクセスが困難であり、周辺施設への回遊性が低い

江之浦測候所はJR東海道線の無人駅、根府川駅が最寄りである。在来線利用で東京から1時間半。新幹線を利用した場合は小田原駅から在来線に乗り換え、さらに駅から江之浦測候所が運行する送迎バスに乗り乗してようやく到着する。民間の箱根登山バスが運営する路線バスは、1日約5本と便が少なく、週末や祝祭日は運行がないことから、来館者の交通手段は、送迎バスと車が大多数を占めている。しかしながら自家用車での来館に関しては、現状の江之浦測候所内の駐車可能台数が25台で来館者数に対して見合っていない。予約が集中する土日の2日間で平均20~30台は、当日入館の問い合わせがあっても駐車場満車を理由に断らざるを得ない。月平均で約200名、年間では約2,400名を逃していることになる。

また、大型バスの受け入れができない仕様になっていることから、団体客の受け入れに困難が生じている。タクシー利用の場合は、根府川駅周辺に常駐しているタクシーがほとんどおらず、配車の必要があるが、交通の混雑事情によっては配車が不可能なこともある。このような現状から、箱根・熱海方面での観光と測

候所の見学を組み合わせた旅程を立ててもアクセスの面で困難を感じる人が一定数おり、江之浦測候所の駐車場設備の拡張、および周辺の交通事業者と連携した交通アクセスの改善が課題である。

さらに、小田原市・江之浦測候所から車で30～40分の距離に位置する、箱根・ポーラ美術館や熱海・MOA美術館はいずれも杉本博司の作品を収蔵しており、展示内容においても連携できる可能性を秘めている美術館が近隣にありながら実現に至っていない。

#### 課題6 アートだけではない多様な魅力を持つ施設としての認知度が低い

現在の主な来館客はアート、建築などの愛好者層であるが、江之浦測候所はアートというカテゴリではくれない魅力を持つ場所であり、石、庭園、自然、宇宙など、様々な視点から日本の文化について思索を深められる類をみない文化施設である。開館以降、国内外の様々なメディアで取り上げられているものの、アート愛好家に向けたものに限定されない施設の多面的な魅力の認知度はいまだ低い。

江之浦測候所の持つ特徴ある建築群と抜群の景観のよさ、加えて文化的な要素が強いユニークベニューとしての需要が高いため、開館以来、さまざまな企業、団体が当施設でカンファレンスやイベントを開催してきているが、小田原市内及び小田原へ来訪した旅行者へのアンケートでの認知度は21%であり、まだ掘り起こされていない需要・ニーズがあると認識しており、戦略的に認知度を上げていくことも課題である。

(参考:昨年度小田原市観光交流センターに来訪した116人にアンケートした結果、知っていると答えた方23人、知らないと答えた方92人)

#### 課題7 小田原市の観光資源・施設・事業者との連携不足

現状では、小田原市内に点在する観光施設や文化施設はそれぞれの魅力を個別に発信していることや、その連携が不十分であることから、豊かな歴史的な資産や自然環境、食文化という観光地としての総合力が高いにも関わらず市内回遊に費やす時間が短いという問題点が長らく指摘されてきた。

更にその中で、江之浦測候所に関しては小田原市街地より離れた土地に位置しており、交通の便に難があるため、来館者が測候所見学の前後に市内の主要観光場所も訪れるプランを組みにくいという問題点がある。

### 3-3. 文化観光拠点施設としての機能強化に向けて取組を強化すべき事項及び基本的な方向性

この課題を解決するために江之浦測候所と市内を結ぶ連携的な観光モデルの創出、インバウンド客の誘致、及び測候所来館者と市内各所の回遊的な交通ルートの創出が必要であるといえる。そのため、本案では、下記の主目的に沿ってこの問題の解決にあたっていく。

なお、2023年3月に改定された小田原市の「小田原市観光戦略ビジョン」においては、新たな小田原観光を強く印象付けるプロモーションの実施、郊外への回遊性向上や文化を生かした観光振興が課題としてあげられており、本計画は市の施策と合致している。特にインバウンドにかかる施策では江之浦測候所が小田原市の観光振興上、重要な拠点として明記されており、公民連携した取り組みは小田原市としても必要としているところである。

- ① 江之浦測候所を一つの文化拠点とし、小田原市内の文化施設を含め、周辺の主要な美術館（特に杉本博司の作品を多く所蔵する箱根・ポーラ美術館や、杉本が展示スペースの設計を担当した熱海・MOA美術館）などと連携して、美術館巡りを一つの軸とし、回遊性をあげていく。また、小田原文化財団が所蔵する美術品には、杉本博司の作品創作に影響を与えた作品が多く存在するが、その多くが、これまで公開の機会に恵まれなかった。よって、新しい展示棟を作ることで、それらを杉本自身の作品とともに、広く一般に公開していく。

- ② 2022 年秋に水際対策が緩和されて以降、海外からの客足はコロナ前に迫る勢いで戻ってきている。江之浦測候所のインバウンド客は、開館以来の常連であるアジア圏の中国・韓国・台湾に加えて、インドネシア、また欧米圏ではイスラエルからの来館者が顕著に増えている。コロナが明けて、杉本の展覧会が海外各国で巡回する予定もあることから、インバウンド客に対しては、現代美術の愛好者をターゲットに、オンライン予約やアクセス情報を多言語で発信してスムーズな来館を促していく。国内客に対しても、引き続きアートや文化に関心の高い愛好者に訴求していくよう努めていく。
- ③ 江之浦測候所では、開館以来、江之浦測候所の訪問のみを主目的として訪れる来館者が多く、平均して2~3時間かけて見学をしてそのまま帰路につく、といった行動パターンがほとんどであった。今後は、小田原市のデジタル化や美食のまちづくりといった新たな施策や、インバウンドを含めた観光客のニーズを見据え、江之浦測候所が観光の起点・ゲートウェイとして機能を果たせるように、交通手段の確保を行いながら、美術館と市内観光を含めた文化体験、宿泊・食事をも伴う観光的要素を含んだ1泊2日のツアーを提案していくなど、市や観光関係諸団体と共に新たな取り組みを行っていくことで、地域の周遊・連帯を強化していく。

#### 取組強化事項1:所蔵作品の展示事業、関連イベントの強化(課題1、4、7への対応)

現在、2025 年開館を目標に新たな展示施設「古美術棟」(仮称)を建設中である。小田原文化財団が所蔵する多くの古美術品は、杉本博司が制作・発表をしてきたこれまでの作品の創造の源にもなっている。古美術作品の展示に適した空間を新設することで、一般公開されてこなかった数多くの古美術品を広く紹介することができ、アーティスト杉本の深い思想・思考を読み解く機会を提供し、杉本作品へのより深い理解に役立てることが可能になる。

更に新たな展示施設を利用し、近隣の美術館や小田原市内の文化施設と連携した展示事業を積極的に立案することで、地域全体での所蔵作品の活用を目指していきたい。

例えば、「小田原三の丸ホール」は小田原駅より徒歩 13 分とアクセスしやすく、小田原城の目の前という好立地に建つ文化・芸術拠点である。2022 年 3 月には、神奈川県立金沢文庫で開催された展覧会「春日神霊の旅 - 杉本博司 常陸から大和へ」に関連したレクチャーを「小田原三の丸ホール」で開催して好評を博したが、今後も江之浦測候所よりもアクセスの良い「小田原三の丸ホール」を講演会、展示、ワークショップなどの会場として積極的に利用することで、市内を訪れた観光客にも江之浦測候所の魅力を広く伝えていきたい。また、今後は江之浦測候所での展示と関連したイベントや講演会を同ホールと連携して行うことで、小田原市内と江之浦測候所とを繋ぎきっかけを創出していく。

また、隣接する「小田原市観光交流センター」は市内・近隣市町への回遊を促進する機能を持っており、同ホールと連携したワークショップ等の開催も可能であることから、施設同士の連携の可能性も広がると考えられる。

#### 取組強化事項2:所蔵作品のデジタルアーカイブ事業の新設と、作品理解の促進に対する対策(課題1、2、3への対応)

多言語に対応したデジタルアーカイブを新設し、国内外からの所蔵作品のデータベースへのアクセスを可能にする。アーカイブ化によって、保存状態や作品の展示方法の難しさにより展示機会が少ない作品についても広く作品情報を公開することができ、所蔵作品をより活発に活用することが可能になる。来館者にとっては、アーカイブ化により敷地内に点在している建築から石造美術、古美術作品に至るまで、測候所全体のコンセプト、作品同士の関連性について、俯瞰的、網羅的に理解ができるようになる。

さらに収蔵品を検索できるデータベースのシステムを構築し、より詳しい作品の解説や高精細画像による閲覧が可能な「デジタルミュージアム」としてインターネット上で公開していくことで、所蔵作品の魅力を広く紹介することを目指していく。

加えてこの「デジタルミュージアム」システムを江之浦測候所での作品鑑賞時の解説としても活用することで、来館者の作品理解を助けるツールとして展開していきたい。江之浦測候所内でのインターネット設備を強化しwi-fiを導入すると共に、QRコード等を利用した作品情報閲覧のための仕組みを構築することによって、様々な鑑賞者に対してよりわかりやすく、より深く作品の魅力を伝えることが期待できる。

「デジタルミュージアム」の活用によって、作品の魅力を国内外に発信し、多様な文化資源を持った施設としての認知度を向上させると共に、興味・関心の範囲が多岐にわたる鑑賞者に対応した、鑑賞体験の質の向上に繋げていきたい。

小田原市では2022年度に市が収蔵する貴重な資料をインターネット上で広く公開し、歴史・文化に触れる機会や場として「おだわらデジタルミュージアム」のサイトをオープンさせている。このような動きは江之浦測候所の理念とも一致するものであり、今後連携していくことも視野にいれている。

### 取組強化事項3：近隣観光事業者との連携による観光ツアーモデルの構築（課題4、7への対応）

江之浦測候所周辺に点在する文化施設、主に美術館を一つの関連テーマで結ぶコンテンツを創出し、更にその物理的アクセスを容易にする周遊的なアクセス手段の構築、観光ツアーの立案に取り組んでいきたい。

具体案として、近隣の熱海・MOA美術館には尾形光琳の『紅白梅図屏風』（国宝）が所蔵されており、毎年2月、梅の時期に公開されているが、杉本博司の作品にはこの「紅白梅図屏風」を本歌として制作された『月下紅白梅図』が存在する。MOA美術館での展示時期に合わせ、この『月下紅白梅図』を江之浦測候所で展示するなど、杉本博司という作家を共通項として関連性を持った展示を連携して行うことで、近隣の美術館を結ぶ周遊的なルート創出のきっかけにしていきたい。



尾形光琳《紅白梅図屏風》(国宝) MOA美術館蔵



杉本博司《月下紅白梅図》

そのために、小田原市観光協会や旅行事業者である小田原ツーリズム、JRや小田急などの交通事業者、また隣接する箱根DMOや美術館、湯河原地域の宿泊施設などとの連携を強化し、小田原地域の観光リピーターではあるが、江之浦測候所に未訪問の新しい顧客層の獲得を目指す。

神奈川県西部における主要な文化施設である江之浦測候所の来館者を増やし、ここを拠点とした他施設との連携を強化することは、地域の観光振興への一助となると考えている。

### 取組強化事項4：滞在型観光の増進による収益性と回遊性の向上に対する取組（課題4、5、6、7への対応）

江之浦測候所はその性格から、芸術鑑賞に特に興味のある客層を主ターゲットとすることが収益性を上げるために重要であると考えている。江之浦測候所の特色でもある、海外インバウンド需要の高さも視

野に入れ、茶室「雨聴天」や野点席での茶会、舞台を活用しての演能といった日本文化を体験するプログラムや、早朝や夜の見学会といった他の美術館ではみられない特別な見学体験の機会を更に充実させていく。実際に、これまで江之浦測候所では季節に合わせた特別鑑賞会を多く開催してきた。特に二至二分の日の出を眺めるプログラムや「満月の会」など、早朝や夜間の鑑賞プログラムも多く、周辺地域での宿泊と合わせた長期滞在が期待できる。交通、宿泊がセットになった特別鑑賞プランを設定することで、江之浦測候所における鑑賞体験の充実を図ると共に、周辺地域の観光、宿泊利用の活性化へと繋げていきたい。

更に今後は、新規建設中の「古美術棟」（仮称）も活用し、ユニークベニューを活かしたMICE やコンベンション、江之浦測候所内での飲食を伴うパーティ等の団体ツアープログラム造成と、海外富裕層向け特別体験プログラムの提供、営業に力を入れる。

小田原市が2022年度に策定した「第6次小田原市総合計画」では、地域資産を活用したまちづくりの推進を掲げ、その中には回遊性の向上や良好な居住環境の創出に取り組み、地域が主体となって地域の資産を活用したまちづくりを推進する旨の記載がある。また、同じく2022年度に策定された「小田原市観光戦略ビジョン」においても「目的地として選ばれる小田原の観光～小田原の観光価値の訴求」「地域がうるおう観光都市の実現～宿泊の促進と観光消費拡大」「郊外エリアへ足を伸ばしてもらおう～回遊の促進」「文化を生かした観光振興～文化によるまちづくりとの連動」「外国人来訪者を素通りさせない～インバウンドの誘客」といった施策があげられており、その拠点として江之浦測候所の名が記載されているように、本計画における取り組みは小田原市の施策と方向性を同じくしており、市としても江之浦測候所の動向に注目し本計画の検討会議には経済部観光課が参加している。

江之浦測候所を拠点に、近年富裕層が求める高付加価値な文化体験をDMO, DMC と連携して造成することで、小田原市および周辺地域をも含め、ユニークな体験ができる場所としての魅力をアピールし、観光客の誘致へとつなげていく。

#### 取組強化事項5：多言語による江之浦測候所及び所蔵作品についての理解促進（課題2、3への対応）

英語圏外、特に中国、台湾、韓国などアジアからの来館者に対する対応が全くなされていないため、公式ホームページ内見学予約に関する情報は、中華圏の言語（簡体字、繁体字）およびハングル語の記載を追加する。またガイドツアーのための人材育成や、ブランドブック、館内案内サインも多言語化の対応を行い、またそれらの国に向けてツアーの造成、営業も行う。加えて、急速に進むDX化に即したよりスムーズな来館を促すための予約システムの改良や、キャッシュレスシステムの導入も強化していく。

また展示作品の解説文は杉本博司執筆によるものであり、解説文自体も作品を構成する一部であることから、まずは英訳から始めて、それらのテキストを精度高く訳して作品への理解を高める。作品の解説に関する英訳は、作品の魅力、背景を十分に理解できるよう文化専門のネイティブスピーカーに発注するなどして、観光庁が指針として挙げている「HowTo多言語解説文整備」に沿って行う。

#### 取組強化事項6：交通アクセスの改善（課題5、7への対応）

江之浦測候所内の駐車場の拡張、及び駐車システムの構築を行う。現在は25台駐車可能なスペースを有しているが、予約の多い週末2日間はすぐに満車となり、見学をお断りする事例が多発している。週単位約20～30台（40～60人）、月単位で約200人、年間2,400人を取りこぼしている計算である。今年度、徒歩1分の距離にある土地を購入した。2025年完成予定の古美術棟オープンのタイミングにあわせて同地を新たな第二駐車場として整備し駐車台数の増加を図る。第二駐車場には、第一のキャパシティ25台とほぼ同じ20～25台を備える予定。また、団体観光グループ、海外富裕層の獲得をしていく上で、大型観光バスの駐車スペースがないのは大きなマイナス要因であり、現在、月単位約3台（60～80人）年間約840人を逃していると試算している。第二駐車場には別途、大型バス用の駐車スペース

も作る予定で、駐車場の造成により、現地まで来たものの見学をあきらめて帰る未着客が多数いるという現状の課題を解決できるものと考えている。

加えて、自家用車以外での来訪を併せて強化するため、タクシーやバス会社等、交通系事業者と連携したツアーの造成、送迎バスの増便や周遊バスの造成などの一般客向けの交通アクセスの強化を行うほか、海外富裕層をターゲットにしたヘリやリムジンなどの交通事業者との連携をはかり、スムーズな来館を目ざす。

また、周囲の文化施設への回遊性を高める上でも、アクセスの改善は重要である。近隣の熱海・MOA美術館や箱根・ポーラ美術館とは、杉本博司を軸とした関連展示・イベントの開催が期待できるが、それらの美術館へのアクセスにはそれぞれの最寄駅からバスを利用する必要がある。観光客の周遊的な動線を生み出すには、魅力的な展示プログラムの創出と同時に、旅行事業者、交通事業者と連携した物理的なアクセスの整備が必須である。

### 3-4. 地域における文化観光の推進への貢献

現代美術作家・杉本博司によって創設された江之浦測候所は、杉本の作品世界を五感で体感できる美術館であり、そのコレクションには杉本自身の作品に留まらず、古美術品や考古遺物、化石など、貴重な文化的・歴史的資源が多数存在し、国内外のアート愛好者に高い評価を得ている施設である。また、江之浦測候所を運営する小田原文化財団は、日本の伝統芸能である能や文楽の振興、更には世界的な現代アーティストの紹介などにも努めてきた。一作家の個人美術館でありながら、これほどまでに幅広い活動を行う施設は国内においても稀有な存在である。江之浦測候所が提供できる現代アート、古美術、古典芸能や茶道など、さまざまなジャンルを体験できるコンテンツの幅広さは、幅広い層の観光客の関心にも訴えることができるだろう。

江之浦測候所の認知度を更にあげ、小田原市内の文化施設とも連携し、全国あるいは世界から来館者を迎えることで、小田原市および近隣地域での観光を創出することにも繋がるだろう。

小田原市には、戦国時代に城下町として発展し、江戸時代には東海道屈指の宿場町として栄えてきた歴史があり、小田原城をはじめとする歴史的文化的資源が多く残っている。明治時代には伊藤博文や大隈重信なども居を構え、大正時代には北原白秋や谷崎潤一郎、尾崎一雄など文学者にも愛されてきた。市内には北原白秋の旧居跡（伝肇寺）や、尾崎一雄邸書斎（小田原文学館内）など文学者に関連する文化資源も多数残されている。また「縄羽根尾貝塚」（縄文時代）や「中里遺跡」（弥生時代）は、その出土品の一部が神奈川県指定重要文化財に指定されており、考古学的価値を持つ文化資源も保有している。加えて、江之浦測候所の位置する片浦地区は柑橘類の栽培が盛んであり、近隣の早川駅からほど近い「小田原漁港」では一般の観光客も新鮮な海鮮を楽しむことができるなど、食文化の面でも、多様な魅力を持っている。

江之浦測候所の強みであるアート愛好者に対する訴求性や、所有する幅広い文化資源を、小田原市内の歴史的・文化的資源と結びつけていくことで、地域全体における文化観光事業、文化資源の更なる活性化に貢献できると考える。小田原市の歴史と新しい江之浦の文化を融合させた芸術プログラムの創出や、小田原の自然、食を堪能できる体験型、滞在型観光を推進していくことで、文化観光にかかわる人々の交流を創出し、魅力ある地域づくりに貢献できると考える。

更に、杉本博司が展示空間の設計を手がけた熱海のMOA美術館や、杉本博司の作品も所蔵し現代美術作家も積極的に紹介する箱根のポーラ美術館など、小田原市内だけでなく、伊豆箱根地区も見据えた広範囲の文化施設と連携することで、より多様なニーズ、興味関心に対応する充実した文化観光が提供できるだろう。加えてこれらの美術館が位置する熱海や箱根は温泉地としても有名であり、近隣の旅行事

業者、宿泊事業者、飲食事業者と協力をはかり、小田原を中心に県西地区に広がる大きな周遊システムを構築してゆくことで、地域全域での滞在時間を増加させ、文化観光の促進につながっていく。

これらの取り組みによって、江之浦測候所がターゲットとしているアート愛好者のみならず、新たな訪問客を生み出すことに繋がり、地域の観光振興へも寄与できるものと考えている。

このように、江之浦測候所を一つの文化拠点として、小田原および県西地区に存在する幅広い文化資源を繋げることで、相互作用的にその活発な活用が発生することを目指していく。

### 3-5. 文化の振興を起点とした、観光の振興、地域の活性化の好循環の創出

江之浦測候所は、海外からの訪問客を始め、遠方からの来館者が多いことが特徴である。2022年2月実施の来館者アンケートでは、神奈川県外からの来館者数が75%以上であった。江之浦測候所のこの特色は、日本国内のみならず海外からの観光客の獲得を視野にいれる小田原市にとっても重要な要素であると言え「小田原市観光戦略ビジョン」にもその名があがっている。加えて、江之浦測候所への訪問客の中には国内外のアートコレクターなど富裕層の来館者も多く存在しており、その滞在時間の長さも特徴的である。江之浦測候所は文化的要素が色濃いことからアート目的の来訪者に偏りがちであるが、それは従来とは違う層への誘客ができる可能性を持つことも意味しており、本計画において新たな文化・観光拠点としての魅力を構築し、小田原市観光協会や旅行事業者である小田原ツーリズム、JRや小田急などの交通事業者と連携しながらその魅力を発信することで、より幅広い客層を取り入れていきたい。加えて、隣接する箱根町などに訪れる多くの観光客にも働きかけることができ、江之浦測候所への来館者を増加させるとともに、周辺観光施設への回遊性向上を図り、観光消費行動につなげることができる。

このように文化・観光拠点としての魅力をあげることで、江之浦測候所への新規の誘客とリピーター客の獲得が可能となり、それに付随して関連する企業や団体、周辺施設等の活性化に寄与できるものと考えている。

#### 4. 目標

目標①:江之浦測候所の来館者数(課題 1, 2, 3, 5, 7 関連、取組強化 1, 2, 5 関連)

(目標値の設定の考え方及び把握方法)

<考え方>

江之浦測候所への来館者数を目標とする。2017 年(H29)の開館以来、8 年を経過しているが、2021 年はコロナの影響で実績が大幅に落ち込んだ。

2025 年度(R7)には古美術棟が新設されるのでリピーターによる来館を取り込み、同時期実施予定の駐車場の拡張により団体の受け入れが増加。同年には「大阪・関西万博」も開催されることから、インバウンド客の増加も見込まれる。

コロナ前の 2019 年度(R1)の 28,913 人を基準にとらえ、2023 年度はアフターコロナの国内外の人流の移動増加につき 20%増、2024 年度は 5%増、2025 年度は 20%増、2026 年度は 5%増、2027 年度は 5%増を目標とする。

<把握方法>

来館者数は、チケット購入数、入館者数により把握する。

年度	実績		目標				
	2021 年度(R3)	2022 年度(R4)	2023 年度(R5)	2024 年度(R6)	2025 年度(R7)	2026 年度(R8)	2027 年度(R9)
目標値(人)	23,188	34,009	34,700	36,000	43,200	45,400	47,700
事業 2—①: デジタルアーカイブ関 連事業			準備 システム構築	コンテンツ公開	コンテンツ公開	コンテンツ公開	コンテンツ公開
事業 5—②: 観光拠点としての広 報 PR 強化事業						旅行会社向け告知 開始	一般客向けリリー ス配信、プロモー ション
事業 6—①: 客用駐車場の拡張・増 設に関する事業				建設許認可準備	造成・工事	工事。完成後 第 2 駐車場として 一般利用開始	一般利用

事業6—③: オンライン予約システム の整備					システム導入準備 開始	開始	開始
------------------------------	--	--	--	--	----------------	----	----

目標②:海外からの来館者数(課題 1,2,3,4,6,7 関連、取組強化事項 2,4,5 関連)

(目標値の設定の考え方及び把握方法)

<考え方>

江之浦測候所への外国人来館者数を目標とする。

コロナ前の2019年度(R1)の28,913人の約10%の2,900人を基準にとらえ、10年後には2倍である5,800人を目指す。

2023年度はインバウンド客が戻ってきていることから、2019年度の20%増、2024年度は5%増とする。

2025年度には古美術棟が新設され、かつ駐車場の拡張により団体での受け入れが可能になることから、インバウンド客の増加も見込まれる。

2026年度、2027年度はそれぞれ前年度の5%増を目標とする。

<把握方法>

チケット購入時の把握及びアンケート調査等の方法により把握する。

年度	実績		目標				
	2021年度(R3)	2022年度(R4)	2023年度(R5)	2024年度(R6)	2025年度(R7)	2026年度(R8)	2027年度(R9)
目標値(人)	400	1,200	3,500	3,600	4,300	4,600	4,800
事業1—③: ガイド育成事業			育成講座の開催 (隔年)※英語		育成講座の開催 ※英語	育成講座の開催 ※英語	育成講座の開催 ※英語
事業1—④: 富裕層をターゲットにした高付加価値プログラムの造成事業			富裕層向けツアー企画・有識者会議	モニターツアー開催(年2回開催)	ツアーブラッシュアップ、ファムトリップ開催	一般販売開始	一般販売開始

事業2-②: QRコードを用いた作品 解説					準備 システム構築	運用開始	運用開始
事業5-①: 公式ホームページの多 言語表記			多言語化作業発注 ホームページで公開	(公開)	(公開)	(公開)	(公開)
事業5-③ ユニークベニューと しての活用推進事業						旅行会社・MICE 用 ブランドブック作成	旅行会社・都内ホテ ル等に配布

目標③: 来館者満足度(課題 1,2,3,4,7 関連、取組強化事項 1,2,3 関連)

(目標値の設定の考え方及び把握方法)

<考え方>

コロナ前に独自で行っていた来館者アンケートでも満足度の聞き取りは行っていたが、細かな部分への不満をすくい上げるものではなかった。課題にも挙げている「作品の魅力」「作品の紹介方法」「多言語化への対応」「アクセス方法」といった項目を具体的に記載し、満足か不満足かを評価してもらう様式でアンケートを実施する。本計画では、拠点(江之浦測候所)の魅力増進のため、古美術棟完成後の展示内容の充実、デジタル化の促進、施設全体の利便性の向上、アクセスの向上を企図しており、それらの成果を来館者の満足度へとつなげていく。

<把握方法>

国内・海外来館者いずれからも経常的にアンケート(ウェブ/紙面)を実施し、最高点を10点として来館者の満足度を集計する。(1点10%、5点50%、10点100%)  
加えて、トリップアドバイザー等の観光施設満足度ランキングやSNSへの書き込み等のデータを注視することで来館者の満足度を把握する。

年度	実績		目標				
	2021年度 (R3)	2022年度 (R4)	2023年度 (R5)	2024年度 (R6)	2025年度 (R7)	2026年度 (R8)	2027年度 (R9)
目標値	—	—	50%	55%	65%	70%	75%
事業1—①: 古美術棟の新設にともなうコンテンツの充実			建物の工事建築	建物の工事建築	古美術棟の完成 オープン記念企画の準備	オープン記念展覧会	近隣美術館との連携企画
事業1—⑤: 測候所の見学と連携した鑑賞体験型観光の提案					企画準備	実施	実施
事業6—②: Wi-fi 設備の導入に関する事業						工事①受付用保護付き Wifi 敷設工事	工事②一般客向け Free-Wifi 敷設工事

目標④:回遊性の向上(課題 1,4,5,6,7 関連、取組強化事項 1,4,6 関連)

(目標値の設定の考え方及び把握方法)

<考え方>

測候所来館者の小田原市内へ回遊する人の割合をアンケート調査することで、回遊性の向上を把握する。

<把握方法>

2021 年度に行った「江之浦測候所を中核とした文化観光拠点計画における来館者アンケート調査」によると、来館者の前後の立ち寄り場所を「小田原市内」と答えた人の割合は 14%であった。

目標値の設定方法として、同様のアンケートを実施し、前後の立ち寄り場所を「小田原市内」と答えた人の割合を把握する。

年度	実績		目標				
	2021年度 (R3)	2022年度 (R4)	2023年度 (R5)	2024年度 (R6)	2025年度 (R7)	2026年度 (R8)	2027年度 (R9)
目標値	14%	—	16%	25%	32%	38%	40%
事業1-②: 近隣の美術館・文化施設への周遊を促す事業					展覧会企画相談	展覧会企画相談	展覧会開催
事業3-①: 小田原市内及び近隣地域の文化施設とのシャトルバス、ハイヤー等でのツアー事業			ツアー企画	モニターツアー開催	ファムトリップ開催	一般販売開始	一般販売開始
事業3-② 小田原の森林観光関連事業者と連携したサイクリングツアー事業			ツアー企画・モニターツアー開催	ファムトリップ開催	一般販売開始	一般販売開始	一般販売開始
事業4-①: 見学プログラムと連携した鑑賞体験型旅行商品の造成			イベント企画相談	イベント開催、ツアー造成	イベント開催、ツアー造成	一般販売開始	一般販売開始

## 5. 目標の達成状況の評価

江之浦測候所の来館者数については、月ごとに集計し、過去のデータを参照しながら達成率を明確にしていく。満足度については、定期的な来館者アンケートをもとに集計、分析を重ねる。年齢、居住地の他、宿泊の有無や来館回数などデータを取り、拠点計画の進捗状況をはかる。

認知度や回遊性の向上については、小田原市観光交流センターや観光協会の協力を得て小田原市への来訪者へのアンケートを実施し、分析する。

数值的、およびアンケート分析等については、半年に一度、推進事業者と共有し、事業実施に反映して目標値達成に向けての連携をはかる。

## 6. 文化資源保存活用施設

### 6-1. 主要な文化資源についての解説・紹介の状況

#### 6-1-1. 現状の取組

##### 1. 文化資源の魅力に関する情報を適切に活用した解説・紹介（施行規則第1条第1項第1号）

- ・来館者全員に無料で配布しているパンフレットにて、展示作品の簡易な作品情報と杉本博司による解説文を掲載している。また、化石、写真作品に関してはパンフレットとは別の作品リストを配布している。
- ・パンフレットに記載されている以上の作品情報や、その時代背景、技法等、詳しく解説するパネルなどはない。
- ・展示施設が限られているため、古美術作品等、取扱いがデリケートな作品は展示機会がない。また、展示作品以外の所蔵作品に関する情報公開はない。

##### 2. 情報通信技術の活用を考慮した適切な方法を用いた解説・紹介（施行規則第1条第1項第2号）

- ・杉本博司のインタビュー映像をQRコードで掲示している。来館者が自由にスマホでQRコードを読み取り視聴できるが、インターネット環境が悪い場合、スムーズに視聴できない。
- ・Instagramにて館内の様子を発信しているが、建築物や施設内の自然をメインとしているため、古美術コレクション等の作品情報の紹介には至っていない。

##### 3. 外国人観光旅客の来訪の状況に応じて、適切に外国語を用いた解説・紹介（施行規則第1条第1項第3号）

- ・パンフレット、作品リスト共に日英2カ国表記のみ。
- ・オンラインによる事前予約制としているが、来館方法・アクセス情報、予約サイトも日英2カ国表記にとどまる。

#### 6-1-2. 本計画における取組

##### 1. 文化資源の魅力に関する情報を適切に活用した解説・紹介（施行規則第1条第1項第1号）

###### (1) 事業番号1-①「古美術棟の新設にともなうコンテンツの充実」関連

- ・古美術作品を展示可能な「古美術棟」（仮称）を新設しており2025年度の完成予定である。杉本博司の作品創作上、大きな源泉となってきたが、今まで展示機会に恵まれなかった貴重な所蔵古美術品を中心に展示し所蔵物の活発な活用を目指す。
- ・古美術棟内に関連資料などを閲覧できるレファレンススペースを設け、作品の魅力をより深く紹介する。
- ・新しい展示施設のオープンにあわせて、オンライン予約の方法を、現在の日時指定・完全予約から変更して来館者の増加に対応する。

###### (2) 事業番号1-③「ガイド育成事業」関連

- ・江之浦測候所と作品の魅力を来館者に伝え、より深い作品理解を提供することを目標に、作品解説、館内案内を行うガイドを育成する。
- ・座学+測候所見学の組み合わせで通訳士を対象に講座を開く。小田原市内でガイドを募集し、ガイド育成講座を開催する。
- ・ガイド育成ののちは、日本語、英語、中国語によるギャラリーツアーを定期的に開催。

## 2. 情報通信技術の活用を考慮した適切な方法を用いた解説・紹介（施行規則第1条第1項第2号）

### (1) 事業番号2-①「デジタルアーカイブ関連事業」、2-②「QRコードを用いた作品解説」

- ・公式ホームページからリンク可能な「デジタルアーカイブ」システムを構築・新設し、所蔵作品の情報を網羅的にアーカイブしていく。言語は日本語と英語。
- ・基本的なデータのみならず、主要な作品に関しては高精細画像や解説、関連資料をリンクさせて表示し「デジタルミュージアム」として展開していく。
- ・測候所での展示作品に関しては、デジタルアーカイブのデータをQRコードで読み込むことで、作品を目の前にしながら、詳細な情報を得ることができるようにする。
- ・解説文の英訳にあたっては、作品の魅力を十分に理解できるよう観光庁が指針として挙げている「HowTo 多言語解説文整備」に沿って行う。
- ・安定したWi-Fi環境を供給するため、中継スポットを増設する。
- ・オンサイトの展示では近づいて見ることのできない古美術作品の微細な部分や、全図を見ることのできない巻物なども鑑賞できるようにする。
- ・インターネット上のアーカイブを使用するため、サテライト展示などにおいても、QRコードを利用し詳細な解説を行うことができる。

## 3. 外国人観光旅客の来訪の状況に応じて、適切に外国語を用いた解説・紹介（施行規則第1条第1項第3号）

### (1) 事業番号2-①「デジタルアーカイブ関連事業」2-②「QRコードを用いた作品解説」、5-①「公式ホームページの多言語表記」関連

- ・公式ホームページ表記は中華圏の言語（簡体字、繁体字）およびハングル語の3アジア言語を導入。すでに日本語、英語は導入済みのため、5言語になる。江之浦測候所への来館方法、予約の仕方などを母国語で理解してもらい、スムーズな来館につなげる。
- ・測候所での展示作品を、デジタルアーカイブのデータをQRコードで読み込むことで、作品を目の前にしながら、英語で詳細な情報を得ることができるようにする。
- ・英語の解説文の作成にあたっては、作品の魅力や背景を十分に理解できるよう文化専門のネイティブスピーカーに発注し、観光庁が指針として挙げている「HowTo 多言語解説文整備」に沿って行う。

### (2) 事業番号1-③「ガイド育成事業」に関連した事業

- ・日本語でのガイドツアーだけでなく、英語、中国語でのガイドツアーも提供する。
- ・今後の来館者の傾向によって、上記、日英中以外の他言語でのギャラリーツアーにも対応できるよう、通訳ガイド業者と協働し検討と対策を進めていく。

## 6-2. 施行規則第1条第2項第1号の文化観光推進事業者との連携

### 6-2-1. 現状の取組

#### 1. 文化観光の推進に関する多様な関係者との連携体制の構築

- ・小田原市内の文化施設では「三の丸ホール」にて、小田原文化財団主催のレクチャーや、舞台の上演を行なっているが、江之浦測候所と直接結びつく様なイベントは開催できていない。
- ・小田原市内とは距離があることもあり、小田原市内の三の丸ホール以外の文化施設との連携した展示、イベント等の開催はできていない。

## 2. 文化観光の推進に関する各種データの収集・整理・分析

小田原市内の文化観光にかかる施設・イベント等への観光入込客調査をはじめ、観光協会では観光資源、地域資源に関する GAP 調査を行ってきたほか、各種イベントや小田原市観光交流センターなどにおいて来訪の動機などを調査するためのアンケートを行ってきており、今後も継続していく。また江之浦測候所来館者向けのアンケートでも、市内や近隣地域への観光について聞き取りをしていく。2022 年 10 月からは小田原市が来訪者の回遊性の向上や滞在時間の増加といった観光施策への活用を図るため、来訪者の属性や回遊パターンなどのデータが収集できる「AI Beacon」を市内の主要観光施設に設置しており、来訪者数、性別、年代、居住地、回遊パターン、滞在時間等のデータを収集している。このデータも動向把握の参考にしていく。

## 3. 文化観光の推進に関する事業の方針の策定及び KPI の設定・PDCA サイクルの確立

観光振興の指針となるものとしては、2016 年度に市内の観光事業者等と協議し市が策定した「小田原市観光戦略ビジョン」がある。2022 年度に改定しているが、そこでの KPI の設定は 2030 度までに入込観光客数を 1,000 万人、観光消費総額を 484 億円（2021 年はそれぞれ 529 万人・180 億円）となっている。この中で、江之浦測候所はインバウンド客や MICE 誘致のための拠点としてその名が挙がっている。このビジョンによる取り組みや評価に関しては、小田原市観光協会が主な市内観光事業者を集めて組織している「観光まちづくり推進懇話会」にて協議を行っている。

### 6-2-2. 本計画における取組

#### 1. 文化観光の推進に関する多様な関係者との連携体制の構築

事業番号 1-②「近隣の美術館・文化施設への周遊を促す事業」関連

小田原市内の文化・芸術拠点施設「小田原三の丸ホール」等、複数の文化施設との連携を今後も強めてレクチャーや関連イベントを行う。

また、これらのコンテンツを物理的、効率的に繋ぐため、観光事業者と協力し、人流のデータ収集を行うなどの連携体制を構築する。

#### 2. 文化観光の推進に関する各種データの収集・整理・分析

現状では、各施設等が連携することでどのような効果があったのかという具体的なデータが存在していない。そこで、小田原市の展開している「AI Beacon」や、リクルートが展開している「おでかけウォッチャー」のデータを参考にすることで、人流などの状況を把握できるようになる。また小田原市や箱根町の持つ観光に係る各種データを収集し活用することで、具体的な数値目標などを設定することができるようになる。

#### 3. 文化観光の推進に関する事業の方針の策定及び KPI の設定・PDCA サイクルの確立

連携する施設等と協議の上、事業の方針や KPI の設定などを行い、毎年度その状況を検証するといった PDCA サイクルにより効率的かつ効果的な事業展開を図っていく。

### 6-3. 施行規則第 1 条第 2 項第 2 号の文化観光推進事業者との連携

#### 6-3-1. 現状の取組

箱根・ポーラ美術館や熱海・MOA 美術館など近隣の美術館には、杉本博司の作品を収蔵しており、展示内容においても連携できそうな美術館が存在しているが、江之浦測候所が主体となって連携した展示、イベント等はこれまで行えていない。

一方、小田原市観光交流センターの運営に関する指定管理者の代表であり、ツアー造成なども手掛ける小田原ツーリズムとはイベント企画等で連携を行っている実績がある。

#### 6-3-2. 本計画における取組

事業番号1-②「近隣の美術館・文化施設への周遊を促す事業」関連

熱海・MOA美術館が所有する尾形光琳作『紅白梅図屏風』（国宝）と同作を本歌として制作された杉本博司作『月下紅白梅図』を同時に公開し、両館を訪れて作品を比較してもらおう。箱根・ポーラ美術館へも来館を促し、3館すべてを巡った場合の特典を考案、回遊を促す。

事業番号1-③「ガイド育成事業」

事業番号1-④「富裕層をターゲットにした高付加価値プログラムの造成事業」

事業番号1-⑤「測候所の見学と連携した鑑賞体験型観光の提案」

事業番号3-①「小田原市内及び近隣地域の文化施設とのシャトルバス、ハイヤー等でのツアー事業」

事業番号3-②「小田原の森林観光事業者と連携したサイクリングツアー事業」

事業番号4-①「見学プログラムと連携した鑑賞体験型旅行商品の造成」

事業番号5-②「観光拠点としての広報PR強化事業」

事業番号5-③「ユニークベニューとしての活用推進事業」

以上の事業の企画・運営に関しては小田原文化財団と株式会社小田原ツーリズム、株式会社エリアコンシェルが協働しながら実施していく。特に富裕層をターゲットにした高付加価値プログラムの造成事業に関しては、幅広い知見、ノウハウ、販売チャンネルなどを持つ株式会社リクルートの参画も検討し、行っていく。

## 7. 文化観光拠点施設機能強化事業

### 7-1. 事業の内容

#### 7-1-1. 文化資源の魅力の増進に関する事業

##### (事業番号 1-①)

事業名	古美術棟の新設にともなうコンテンツの充実
事業内容	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 2025 年度の完成を目標に、古美術作品を展示可能な「古美術棟」（仮称）を建築中である。展示施設完成後は、杉本博司の作品創作上、大きな源泉となってきたものの、これまで展示機会に恵まれなかった貴重な古美術作品を中心に展示し、文化資源の紹介・活用に努めていく。</li> <li>・ 作品理解を支援するパンフレットや、作品解説シートを作成し、展覧会毎に配布する。</li> <li>・ 展示作品に関連する参考図書、関係資料、関連映像などを併せて閲覧可能なスペースを「古美術棟」内に設置し、作品理解を支援する。</li> <li>・ オンライン予約の方法を、現在の日時指定・完全予約制から変更して来館者数の増加や見学時間の延長に対応していく。</li> </ul> <p>※本事業は、事業番号 6-③「オンライン予約システムの整備」とも連動する。</p>
実施主体	小田原文化財団
実施時期	2025 年度～2027 年度
継続見込	計画期間終了後も継続実施（財源：事業費）
アウトプット目標	2025 年度オープン
必要資金調達方法	9 百万円（内訳：3 百万円（入館料） 6 百万円（補助金（文化観光推進事業補助金））※建築工事費は 600～700 百万円見込み。100%自己財源により拠出 ※※国の予算事業等について、記載のとおり調達できない場合には、自己資金による対応等について検討する。

##### (事業番号 1-②)

事業名	近隣の美術館・文化施設への周遊を促す事業
事業内容	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 杉本博司と縁のある熱海・MOA 美術館、箱根・ポーラ美術館などと連携していく。熱海・MOA 美術館が所有する尾形光琳作「紅白梅図屏風」（国宝）と同作を本歌として制作された杉本博司作「月下紅白梅図」を江之浦測候所・古美術棟で同時に公開し、両館を訪れて作品を比較してもらう。箱根・ポーラ美術館へも来館するような回遊を促す仕掛けをもうける。</li> <li>・ 杉本博司本人の作品だけではなく、MOA 美術館が所有する古美術作品など、杉本が影響を受けた作家や作品、或いはポーラ美術館が展示する同時代の作家の作品を併せて観ていくことで、杉本博司、並びに江之浦測候所への理解が深まることも期待できる。</li> <li>・ 小田原三の丸ホール等とレクチャーや関連イベントを実施し、複数の施設への見学を促す。</li> </ul>

	※本事業は事業番号3-①「小田原市内及び近隣地域の文化施設とのシャトルバス、ハイヤー等でのツアー事業」と連動する。
実施主体	小田原文化財団
実施時期	2025年度～2027年度 古美術棟では年2回程度展示作品を入れ替えつつ展覧会の開催を予定
継続見込	計画期間終了後も継続実施（財源：小田原文化財団 事業費）
アウトプット 目標	展示機会、年1～2回
必要資金 調達方法	6百万円（内訳：2百万円（入館料）4百万円（補助金（文化観光推進事業補助金））※国の予算事業等について、記載のとおり調達できない場合には、自己資金による対応等について検討する。

（事業番号1-③）

事業名	ガイド育成事業
事業内容	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 江之浦測候所と展示作品の魅力を来館者に伝え、より深い作品理解を提供することを目標に、作品解説、館内案内を行うガイドを育成し、定期的にギャラリーツアーを実施する。また、江之浦測候所は海外からの来館者が多いことから、日本語だけの対応ではなく、多言語での対応が望まれる。座学+測候所見学の組み合わせで通訳士を対象に講座を開く。小田原市内でガイドを募集し、ガイド育成講座を開催する。</li> <li>・ 古美術棟開館に向けても再度ガイド講座を行い、通訳ガイドのレベルの底上げを図ることで、日英によるギャラリーツアーを可能にすることを目標にする。</li> </ul>
実施主体	小田原文化財団、株式会社小田原ツーリズム、小田原市観光協会
実施時期	2023年度、2025年度、2026年度、2027年度
継続見込	事業終了後、公認ツアーガイドとして認定
アウトプット 目標	英語ガイド10名を育成。
必要資金 調達方法	7.7百万円（内訳：2.6百万円（入館料）5.1百万円（補助金（文化観光推進事業補助金）） ※国の予算事業等について、記載のとおり調達できない場合には、自己資金による対応等について検討する。

（事業番号1-④）

事業名	富裕層をターゲットにした高付加価値プログラムの造成事業
事業内容	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 江之浦測候所は国内外の富裕層の来館が多い施設である。施設のもつ特性を活かし、これまで限定的に開催してきた様々な方式での特別見学の経験を基盤に、富裕層をターゲットにした付加価値の高い見学プログラムを造成、高価格帯で提供していく。</li> <li>・ 茶室「雨聴天」を中心に敷地内を活用した特別茶会、小田原文化財団の強みでもある伝統芸能などのパフォーマンス、コンサート鑑賞、有識者を招聘したギャラ</li> </ul>

	<p>リートークなどを盛り込んだ富裕層向け特別プログラムを季節にあわせて用意する。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・一般公開時間（午前の部：10時～13時／午後の部：13時半～16時半）前後の早朝、夕刻以降の時間も活用し、特別鑑賞の機会をもうける。近隣エリアの飲食店、宿泊施設と連携し、滞在時間の拡大、消費の増加に繋げる。</li> <li>・夕刻からのガイド付き見学に、シェフを招聘し屋内施設で行う一夜限りのスペシャルディナーをセットにした特別プログラムを造成。近隣の飲食店との提携も試み、アフターディナーの宿泊施設の紹介も含め、富裕層向け特別体験パッケージを提案。インバウンド向けには地産地消を活かした日本料理の魅力を発見してもらう機会としても活用する。</li> <li>・近隣の富裕層をターゲットとした飲食店と提携し、夕刻からのガイドつき見学の後、飲食店への送迎付きプログラムを立案。旅行代理店とも連携し、近隣ホテル・旅館の宿泊、翌日の近隣文化施設訪問をセットにしたツアーとして展開し、地域の経済活性化につなげる。</li> <li>・ヘリコプターでの来館の実証実験を行い、造成可能か検証する。</li> <li>・初年度は企画を検討後、調査を行い、さらに有識者会議でブラッシュアップを行ない、次年度のモニターツアー造成につなげる。ツアーの検証や実販売化に向けての問題点の洗い出しを行ない、旅行会社向けのファムトリップを開催、その後一般販売を行う。</li> <li>・「小田原市観光戦略ビジョン」をもとに、小田原市が展開していく施策へ提言できる機会を活用し、本計画で実施予定のプログラムに関して官民で取り組めるよう働きかけを行っていく。</li> <li>・事業番号1-②「近隣の美術館・文化施設への周遊を促す事業」、3-①「小田原市内及び近隣地域の文化施設とのシャトルバス、ハイヤー等でのツアー事業」とも関連し、近隣の文化施設や宿泊施設、交通業者と連携することで、地域全体での観光の活性化につなげていく。</li> </ul>
実施主体	小田原文化財団、小田原市、株式会社エリアコンシェル、株式会社リクルート、株式会社小田原ツーリズム、小田原市観光協会
実施時期	2023年度～2026年度
継続見込	2026年度より一般販売開始、事業費にて継続見込
アウトプット目標	特別プログラム4本、ツアー造成本数5本
必要資金調達方法	24百万円（内訳：8百万円（入館料） 16百万円（文化観光推進事業補助金）） ※国の予算事業等について、記載のとおり調達できない場合には、自己資金による対応等について検討する。

（事業番号1-⑤）

事業名	測候所の見学と連携した鑑賞体験型観光の提案
事業内容	<ul style="list-style-type: none"> <li>・江之浦測候所の日中の見学会に加え、ごく限定された機会で行ってきた早朝、日没後の見学企画を増やしていく。</li> <li>・江之浦測候所への早朝・夜間の来館により、来館者が自ずから周辺地域を周遊し、宿泊するきっかけになることで、地域の経済的循環に寄与することを目指す。</li> <li>・オンライン予約システムを改良するタイミングで、特別な時間帯の見学会もシステ</li> </ul>

	ムで予約できるようにする。  ※事業番号 1-②「近隣の美術館・文化施設への周遊を促す事業」、事業番号 1-④「富裕層をターゲットにした高付加価値プログラムの造成事業」、事業番号 3-①「小田原市内及び近隣地域の文化施設とのシャトルバス、ハイヤー等でのツアー事業」と関連する
実施主体	小田原文化財団、株式会社エリアコンシェル、株式会社小田原ツーリズム
実施時期	2026 年度～2027 年度
継続見込	1 年目に実施する回数と集客数を分析し次年度から回数を調整して継続実施
アウトプット目標	年毎目標（見学開催 8～10 件）
必要資金調達方法	2 百万円（内訳：運営人件費 2 百万円（内訳：0.66 百万円（入館料） 1,34 百万円（補助金文化観光推進事業補助金）） ※国の予算事業等について、記載のとおり調達できない場合には、自己資金による対応等について検討する。

7-1-2. 情報通信技術を活用した展示、外国語による情報の提供その他の国内外からの観光旅客が文化についての理解を深めることに資する措置に関する事業

(事業番号 2-①)

事業名	デジタルアーカイブ関連事業
事業内容	<ul style="list-style-type: none"> <li>作品の基本的な情報、高精細写真、詳しい解説などを記載したデジタルアーカイブを作成する。</li> <li>所蔵作品を網羅的にアーカイブしていくと共に、主要な作品に関しては高精細画像や解説、関連資料をリンクさせて表示し、より深く、多面的に作品の魅力を紹介する「デジタルミュージアム」として展開していく。</li> <li>作品情報を日本語、英語でデジタル化し蓄積することで、QR コードで取り出すことができる仕立てにする。</li> <li>高精細画像を使用することで、通常、至近距離で見ることのできない古美術作品の詳細や、巻物の全図なども鑑賞可能になる。</li> <li>作品情報の英訳は、観光庁が指針として挙げている「HowTo 多言語解説文整備」に沿って行う。</li> </ul>
実施主体	小田原文化財団
実施時期	2023 年度システム構築開始。完成し次第、24 年度から運用開始
継続見込	システムは随時、アップデート・改良をしていくが、主システムは常時運用
アウトプット目標	システムへのアクセス数、月間 70～100 件。
必要資金調達方法	12 百万円（内訳：4 百万円（入館料） 8 百万円（文化観光推進事業補助金）） ※国の予算事業等について、記載のとおり調達できない場合には、自己資金による対応等について検討する。

## (事業番号2-②)

事業名	QRコードを用いた作品解説
事業内容	<ul style="list-style-type: none"> <li>作品理解に関する情報をより多くの人々に提供することを目標に、事業番号2-①「デジタルアーカイブ関連事業」によりデジタル化される作品群のデータを利用し、スマホをかざしてQRコードを読み取ることで、作品を前にしながら解説を読むことが可能になる。測候所見学の大きなコンセプトである、自然景観のなかで、当日の天候、風景や外界の音をも含めた作品鑑賞、これら一連を有機的に体験してもらう趣向に反しないように、解説は全ての作品を対象とせず、ピンポイントでいくつかの作品のみとする。</li> <li>作品解説は日英2言語で提供する。課題として挙げられている国内・海外を問わず杉本博司作品に初めて触れる来館者にとって、深い理解を促す一助となる。</li> <li>QRコードを読み込むことで、パンフレットや個別のハンドアウトに記載していない、より詳細な作品情報・解説をその場で閲覧できるようにする。</li> <li>作品解説を始めるにあたりWi-Fi設備を整え室内でのネット環境の安定を図る。QRコード読み取りがスムーズに行える。</li> <li>現地での鑑賞において、必要な人により深く、よりわかりやすい解説を届けることが可能になる。サテライトでもそれらの情報にスムーズにアクセスできるよう、パンフレット、リーフレット等に記載していく。</li> </ul>
実施主体	小田原文化財団
実施時期	2025年度
継続見込	運営方法が確立後は継続していく
アウトプット目標	利用率：入館者の70～80%
必要資金調達方法	1百万円（内訳：1百万円（内訳：0.4万円（入館料）0.6百万円（文化観光推進事業補助金））※国の予算事業等について、記載のとおり調達できない場合には、自己資金による対応等について検討する。

## 7-1-3. 国内外からの観光旅客の移動の利便の増進その他の文化資源保存活用施設の利用に係る文化観光に関する利便の増進に関する事業

## (事業番号3-①)

事業名	小田原市内及び近隣地域の文化施設とのシャトルバス、ハイヤー等でのツアー事業
事業内容	<ul style="list-style-type: none"> <li>展覧会や各種イベント、富裕層向け特別イベントの造成時に、ハイヤー会社と連携してツアーを企画。タクシー会社の乗務員に対しても一部ガイド講座への参加を促し、運転手が日本語ガイドを務めることができるような仕組みを作る。</li> </ul> <p>※事業番号1-②「近隣の美術館・文化施設への周遊を促す事業」、事業番号1-④「富裕層をターゲットにした高付加価値プログラムの造成事業」、事業番号4-①「見学プログラムと連携した鑑賞体験型旅行商品の造成」と関連する。</p>
実施主体	株式会社小田原ツーリズム、伊豆箱根交通株式会社、小田原文化財団
実施時期	2023年度～2026年度
継続見込	2024年度より一般販売開始、小田原文化財団事業費にて継続見込

アウトプット 目標	モニターツアー本数5本、タクシー乗務員ガイド育成2名、ツアー参加者50名
必要資金 調達方法	1.5百万円（内訳：0.5百万円（入館料）1百万円（文化観光推進事業補助金）） ※国の予算事業等について、記載のとおり調達できない場合には、自己資金による対応等について検討する。

（事業番号3-②）

事業名	小田原の森林観光関連事業者と連携したサイクリングツアー事業
事業内容	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 駐車場が少ないことが課題である江之浦測候所への新たな来訪手段として、小田原市内でキャンプ場やフォレストアドベンチャー、フォレストバイクを運営する株式会社T-FORESTRYと連携して山から海を通して江之浦測候所を回る海外向けのサイクルツアーを造成する。</li> <li>・ ターゲットとしては健康志向の強いインバウンドであり、宿泊施設等から出発地点への送迎を行うことで参加しやすい環境を整える。</li> <li>・ 作成したツアーは動画や写真を撮影して海外向けに発信する。またそのツアーが予約できるように設定する。</li> </ul> ※事業番号1-④「富裕層をターゲットにした高付加価値プログラムの造成事業」と関連する。
実施主体	株式会社小田原ツーリズム、小田原文化財団
実施時期	2023年度～2024年度
継続見込	2025年度より一般販売開始、小田原ツーリズム事業費にて継続見込
アウトプット 目標	モニターツアー開催、ツアー開催参加者20名
必要資金 調達方法	3百万円（内訳：1百万円（入館料）2百万円（文化観光推進事業補助金）） ※国の予算事業等について、記載のとおり調達できない場合には、自己資金による対応等について検討する。

7-1-4. 文化資源に関する工芸品、食品その他の物品の販売又は提供に関する事業

（事業番号4-①）

事業名	見学プログラムと連携した鑑賞体験型旅行商品の造成
事業内容	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 江之浦測候所での早朝・夜間の見学会など、特別な鑑賞プログラムを組み込んだ宿泊プランを造成する。</li> <li>・ 周辺地域を周遊する旅行プランを企画することで、併せて周囲の小売店、飲食店の利用を促すための取り組みを行う。</li> </ul> ※事業番号1-②「近隣の美術館・文化施設への周遊を促す事業」、事業番号1-④「富裕層をターゲットにした高付加価値プログラムの造成事業」、事業番号3-①「小田原市内及び近隣地域の文化施設とのシャトルバス、ハイヤー等でのツアー事業」と関連する。
実施主体	小田原文化財団、株式会社エリアコンシェル、株式会社小田原ツーリズム
実施時期	2027年度
継続見込	集客の見込める展覧会やイベントに関して小田原文化財団事業費で継続
アウトプット 目標	目標（ツアー参加者合計100名、宿泊プラン5件）

必要資金 調達方法	6百万円（内訳：2百万円（入館料） 4百万円（文化観光推進事業補助金）） ※国の予算事業等について、記載のとおり調達できない場合には、自己資金による対応等について検討する。
--------------	---

7-1-5. 国内外における文化資源保存活用施設の宣伝に関する事業

(事業番号5-①)

事業名	公式ホームページの多言語表記
事業内容	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 現行の日本語・英語の2言語対応のホームページに、東アジアの言語(中国語2種(簡体字・繁体字)とハングル語を加える。</li> <li>・ 欧米圏のフランス語、スペイン語を多言語化の対象にするかは、今後の来館者の動向を見て、長期的に検討していく。</li> <li>・ 公式ホームページの多言語化は、見学案内やアクセス情報のみとし、作品解説は含まれない。</li> </ul>
実施主体	小田原文化財団
実施時期	2023年度
継続見込	言語追加が完成後は継続して閲覧
アウトプット 目標	3言語に対応。HPでの公開
必要資金 調達方法	1.6百万円（内訳：0.6百万円（入館料） 1百万円（補助金文化観光推進事業補助金）） ※国の予算事業等について、記載のとおり調達できない場合には、自己資金による対応等について検討する。

(事業番号5-②)

事業名	観光拠点としての広報PR強化事業
事業内容	<p>江之浦測候所に関する情報をよりスピーディに国内外の多方面に発信するため、SNSをはじめ多様化する広報ツールの導入を検討、実施する。</p> <p>&lt;国内PR&gt;</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 特別イベントなど江之浦測候所の活動に関する認知度を上げ、新規・リピート来館を促すため計画的な広報活動を行えるよう、専門性の高いPR会社にスポット的に外注することを検討し、情報発信を強化する。</li> <li>・ 江之浦測候所の価値や最新情報および連携する近隣施設の情報を発信するオウンドメディアの導入を検討、構築。より主体的に施設の魅力を伝えていく。</li> </ul> <p>&lt;海外PR&gt;</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ インバウンド誘致にも対応するバイリンガルのPR動画の制作</li> <li>・ 海外VIP、WIP向け旅行会社にリーチする媒体（紙媒体・ウェブ媒体）への広告出稿・タイアップ記事掲載の実施。</li> </ul> <p>◎大使館や都内高級ホテルへ配本している雑誌への出稿と合わせてインフルエンサーの現地取材、情報発信を行うPRパッケージの活用を検討。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 今回の海外向け施策のターゲットである台湾、香港に特化したメディアへの広告出稿・タイアップ記事掲載を実施。</li> </ul> <p>※海外施策については、ポストコロナの状況を鑑み、実施時期・内容を検討していく。</p>

実施主体	小田原文化財団、株式会社エリアコンシェル
実施時期	2023 年度～2027 年度
継続見込	本計画の実施により増加した収益の一部を本事業の効果継続に充当していく
アウトプット 目標	海外からの入館者数増 1,200 名 (2022 年) →4,300 名 (2025 年) →4,800 名 (2027 年) オウンドメディアの公開： 古美術棟オープンにあわせ 2025 年度を目指す
必要資金 調達方法	15 百万円 (内訳：5 百万円 (入館料) 10 百万円 (文化観光推進事業補助金)) ※国の予算事業等について、記載のとおり調達できない場合には、自己資金による対応等について検討する。

(事業番号 5-③)

事業名	ユニークベニューとしての活用推進事業
事業内容	事業番号 1-④「富裕層をターゲットにした高付加価値プログラムの造成事業」をベースに、MICE 事業に繋げるプランを提案する。 <ul style="list-style-type: none"> <li>神奈川県が行っている MICE 誘致の取り組みの中で、江之浦測候所がユニークベニューに選定されていることを活かし、事業番号 1-④で行ったイベントや特別プログラムを横浜で開催される MICE の関連プログラム (伝統芸能、アフターコンベンション、同伴者向けの観光/日本文化体験プログラム) として整理しまとめたものをブランドブックとして制作し、神奈川県やパシフィコ横浜、MICE 専門の旅行会社などに情報提供する。</li> <li>日本の人間ドックに関心の高いマレーシア、インドネシアなどのアジア圏を主要なターゲットに絞り、小田原箱根クリニックの海外向けの医療ツーリズムと連携したプログラムの開発を合わせて行う。</li> </ul>
実施主体	小田原文化財団、株式会社エリアコンシェル、株式会社小田原ツーリズム、小田原市観光協会
実施時期	2026 年度～2027 年度
継続見込	ブランドブック及び営業を行うことで継続して運用可能
アウトプット 目標	MICE 問い合わせ件数 10 件
必要資金 調達方法	6 百万円 (内訳：2 百万円 (入館料) 4 百万円 (文化観光推進事業補助金)) ※国の予算事業等について、記載のとおり調達できない場合には、自己資金による対応等について検討する。

7-1-6. 7-1-1～7-1-5 の事業に必要な施設又は設備の整備に関する事業

(事業番号 6-①)

事業名	客用駐車場の拡張・増設に関する事業
事業内容	<ul style="list-style-type: none"> <li>現行の 25 台収容可能な第一駐車場に加え、近隣に取得した土地に大型観光バスの駐車が可能で第 2 駐車場を作る。第 2 駐車場も 20～25 台を備え、別途、大型バス用の駐車スペースも作る予定で、自家用車で未着客を年間 2,400 人、大型バス乗り入れ可能により年間 840 人を取りこぼさずに迎え入れることが可能になる。</li> </ul>

	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 駐車システムはゲート式課金方法を導入し、更にはポーラ美術館が導入しているようなホームページ上に駐車可能台数の残数をリアルタイムで表示し、来館者自身が事前確認できるシステムの導入も検討する。</li> </ul> <p>※本事業は、事業番号 1-①「古美術棟の新設にともなうコンテンツの充実」に関連する整備事業。</p>
実施主体	小田原文化財団
実施時期	2024 年度 許認可、2025 年度工事、2026 年度継続工事、完成
継続見込	駐車場完成後は常設
アウトプット 目標	建設・工事の終了をもって 100%
必要資金 調達方法	100 百万円（内訳：34 百万円（自己財源）67 百万円（文化観光推進事業補助金）） ※国の予算事業等について、記載のとおり調達できない場合には、自己資金による対応等について検討する。

(事業番号 6-②)

事業名	Wi-fi 設備の導入に関する事業
事業内容	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 館内でのインターネット環境を整備し、事業番号 2-②「QR コードを用いた作品解説」をよりスムーズに使用できる様にすると同時に、受付チェックイン時の入館料精算やミュージアムショップでのレジ機能を強化することで館内の利便性の向上を目指す。※QR コードを利用可能にする一般客向けフリーWifi の導入は、古美術棟の竣工がより近づく 2027 年度に工事を行う。</li> <li>・ メディアを介さず SNS 他、デジタルツールで情報を取得する人々が増加していることを踏まえ、館内でスムーズにウェブを利用できる環境を整備する。館内のみならず、敷地内の屋外に中継的に Wi-Fi スポットをどの程度設置するかの可能性については精査のうえ検討する。</li> </ul>
実施主体	小田原文化財団
実施時期	2026 年度、2027 年度
継続見込	導入後は継続
アウトプット 目標	導入年度を分けて段階的に機能強化を図る。2026 年度は、レジ機能およびキャッシュレス決済に必要なオーソリのためのセキュリティー度の高い Wifi を導入。一般客向けフリーWifi の敷設は古美術棟の完成がより近づく 2027 年度に工事。
必要資金 調達方法	6.59 百万円（内訳：2.2 百万円（入館料）4.39 百万円（文化観光推進事業補助金））※国の予算事業等について、記載のとおり調達できない場合には、自己資金による対応等について検討する。

(事業番号 6-③)

事業名	オンライン予約システムの整備
事業内容	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 現在 1 日 2 回（午前・午後）日時指定の事前予約・完全入替制としているが、古美術棟が公開開始となる 2025 年から運営方法を見直し、予約の時間枠および方法を変更する。</li> <li>・ 運営方法の大幅な変更にあわせて、ペーパーレスチケットのオンライン予約システムに切り替えたい。</li> </ul>

	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 事業番号 1-①「古美術棟の新設にともなうコンテンツの充実」に関連し、入館者が増えることに対応するため実施。</li> <li>・ 事業番号 4-②「測候所の見学と連携した鑑賞体験型観光の提案」に関連。早朝や夜間の見学会を一般客が年間を通して見学可能にしていく。</li> </ul>
実施主体	小田原文化財団
実施時期	2025 年度
継続見込	導入後は継続可
アウトプット 目標	システム導入後、運用開始
必要資金 調達方法	2.5 百万円（内訳：0.84 百万円（入館料）1.66 百万円（文化観光推進事業補助金）） ※国の予算事業等について、記載のとおり調達できない場合には、自己資金による対応等について検討する。

## 7-2. 特別の措置に関する事項

### 7-2-1. 必要とする特例措置の内容

事業番号・事業名	
必要とする特例の根拠	文化観光推進法第 条（ 法の特例）
特例措置を受けようとする主体	
特例措置を受けようとする事業内容	
当該事業実施による文化観光推進に対する効果	

## 7-3. 必要な資金の額及び調達方法

	総事業費	事業番号	所要資金額	内訳
2023 年度 令和5 年度	14.9 百万円	事業番号1-③	2.95 百万円	0.99 百万円 (入館料) 1.96 百万円 (文化観光推進事業補助金)
		事業番号1-④	2 百万円	0.67 百万円 (入館料) 1.33 百万円 (文化観光推進事業補助金)
		事業番号2-①	4.6 百万円	1.6 百万円 (入館料) 3 百万円 (文化観光推進事業補助金)
		事業番号3-①	0.75 百万円	0.25 百万円 (入館料) 0.5 百万円 (文化観光推進事業補助金)
		事業番号3-②	1 百万円	0.4 百万円 (入館料) 0.6 百万円 (文化観光推進事業補助金)
		事業番号5-①	1.6 百万円	0.6 百万円 (入館料) 1 百万円 (文化観光推進事業補助金)
		事業番号5-②	2 百万円	0.67 百万円 (入館料) 1.33 百万円 (文化観光推進事業補助金)
2024 年度 令和6 年度	13.15 百万円	事業番号1-④	6 百万円	2 百万円 (入館料) 4 百万円 (文化観光推進事業補助金)
		事業番号2-①	1.9 百万円	0.6 百万円 (入館料) 1.3 百万円 (文化観光推進事業補助金)
		事業番号3-①	0.25 百万円	0.08 百万円 (入館料) 0.16 百万円 (文化観光推進事業補助金)
		事業番号3-②	2 百万円	0.67 百万円 (入館料) 1.33 百万円 (文化観光推進事業補助金)
		事業番号5-②	3 百万円	1 百万円 (入館料) 2 百万円 (文化観光推進事業補助金)
2025 年度 令和7 年度	69.47 百万円	事業番号1-①	3 百万円	1 百万円 (入館料) 2 百万円 (文化観光推進事業補助金)
		事業番号1-②	2 百万円	0.67 百万円 (入館料) 1.33 百万円 (文化観光推進事業補助金)
		事業番号1-③	0.82 百万円	0.28 百万円 (入館料) 0.54 百万円 (文化観光推進事業補助金)
		事業番号1-④	8 百万円	2.67 百万円 (入館料) 5.33 百万円 (文化観光推進事業補助金)
		事業番号2-①	1.9 百万円	0.6 百万円 (入館料) 1.3 百万円 (文化観光推進事業補助金)
		事業番号2-②	1 百万円	0.4 百万円 (入館料) 0.6 百万円 (文化観光推進事業補助金)
		事業番号3-①	0.25 百万円	0.08 百万円 (入館料) 0.16 百万円 (文化観光推進事業補助金)
		事業番号5-②	5 百万円	1.67 百万円 (入館料) 3.33 百万円 (文化観光推進事業補助金)
		事業番号6-①	45 百万円	15 百万円 (自己財源) 30 百万円 (文化観光推進事業補助金)
事業番号6-③	2.5 百万円	0.84 百万円 (入館料) 1.66 百万円 (文化観光推進事業補助金)		

2026 年度 令和 8 年度	20.02 百万円	事業番号 1-①	3 百万円	1 百万円 (入館料) 2 百万円 (文化観光推進事業補助金)
		事業番号 1-②	2 百万円	0.67 百万円 (入館料) 1.33 百万円 (文化観光推進事業補助金)
		事業番号 1-③	0.93 百万円	0.31 百万円 (入館料) 0.62 百万円 (文化観光推進事業補助金)
		事業番号 1-④	8 百万円	2.67 百万円 (入館料) 5.33 百万円 (文化観光推進事業補助金)
		事業番号 1-⑤	1 百万円	0.4 百万円 (入館料) 0.6 百万円 (文化観光推進事業補助金)
		事業番号 2-①	1.9 百万円	0.6 百万円 (入館料) 1.3 百万円 (文化観光推進事業補助金)
		事業番号 3-①	0.25 百万円	0.08 百万円 (入館料) 0.16 百万円 (文化観光推進事業補助金)
		事業番号 5-②	2.5 百万円	0.83 百万円 (入館料) 1.66 百万円 (文化観光推進事業補助金)
		事業番号 6-②	0.44 百万円	0.15 百万円 (自己財源) 0.29 百万円 (文化観光推進事業補助金)
2027 年度 令和 9 年度	31.55 百万円	事業番号 1-①	3 百万円	1 百万円 (入館料) 2 百万円 (文化観光推進事業補助金)
		事業番号 1-②	2 百万円	0.67 百万円 (入館料) 1.33 百万円 (文化観光推進事業補助金)
		事業番号 1-③	3 百万円	1 百万円 (入館料) 2 百万円 (文化観光推進事業補助金)
		事業番号 1-⑤	1 百万円	0.4 百万円 (入館料) 0.6 百万円 (文化観光推進事業補助金)
		事業番号 2-①	1.9 百万円	0.6 百万円 (入館料) 1.3 百万円 (文化観光推進事業補助金)
		事業番号 4-①	6 百万円	2 百万円 (入館料) 4 百万円 (文化観光推進事業補助金)
		事業番号 5-②	2.5 百万円	0.83 百万円 (入館料) 1.66 百万円 (文化観光推進事業補助金)
		事業番号 5-③	6 百万円	2 百万円 (入館料) 4 百万円 (文化観光推進事業補助金)
		事業番号 6-②	6.15 百万円	2.05 百万円 (入館料) 4.1 百万円 (文化観光推進事業補助金)
合計	149.09 百万円			

8. 計画期間

2023 年度～2027 年度

\* 全ての事業の記載が終わり次第記載

2023 年度	2024 年度	2025 年度	2026 年度	2027 年度